

正倉院正倉屋根瓦の編年と資料的価値

芦 田 淳 一

はじめに

平成23年から平成26年にかけて、正倉院正倉の屋根瓦葺替と軒の垂下対策を主とした正倉院正倉整備工事（以下：平成修理）が実施された。筆者自身も株式会社山本瓦工業の瓦調査員として、瓦の分類及び調査作業に従事し、多くの貴重な古瓦に触れることができた。平成修理は、瓦の葺替工事が主事業であり、限られた期間の中で、型式分類だけでなく調査を実施することは困難を極めたが、その成果の一部は『正倉院正倉整備記録』（以下：整備報告）に収められている^(注1)。

本工事終了後の平成28年、宮内庁正倉院事務所より、敷地内に保存されていた整備報告掲載瓦と、不再用瓦の管理台帳を作成する業務の委託を受け、3,000枚に及ぶ個体の整理作業と調査を実施する機会を再び得ることになった。

その対象は、一つが保存用金属製パレットに収納されていた鎌倉時代から大正時代の軒丸瓦76本と同軒平瓦40枚、奈良時代の丸瓦68本、同平瓦436枚、同熨斗瓦687枚である。もう一つが、所内の敷地に置かれていた鎌倉時代から江戸時代の瓦、約10,700枚（丸瓦2,458本、平瓦8,248枚）のうち、今回研究資料として抽出した丸瓦554本・平瓦1,414枚、それに加え修理前に吸水・透水試験のサンプルとして採取されていた瓦91枚である。

本稿は、平成修理と今回の再調査から、正倉院正倉屋根瓦の編年とその資料的価値について論じるものである。

その内容は、正倉院正倉屋根瓦の①解体前の瓦葺き状況、②丸瓦・平瓦の型式分類・編年方法と年代観、③修理時期とその規模、④ヘラ書きや刻印などの発見資料に基づく考察である。

まず、屋根瓦解体前の古瓦が如何に葺かれていたのか。それを丸瓦・平瓦と軒瓦の時代別分布状況から確認していくことにする。なお、ここでいう古瓦とは、古代から近世のものを指す。

1. 古瓦の時代別分布

正倉院正倉（以下：正倉）は、旧東大寺境内の北西に位置し、桁行9間梁行3間の寄棟造で東面する。

今回の平成修理に際し、筆者は屋根瓦解体前に丸瓦・平瓦の各屋根面における時代分布調査を、古代・中世・近世・近代・現代といった区分で実施した（図1・2）。葺きあげられた状態で屋根瓦の時代判別が可能なのは、中・近世建築界における野屋根や規矩といった造営技術の発展と、軒先の曲線美から屋根の大きさを重要視する建築意匠への変化、そして寺院だけで

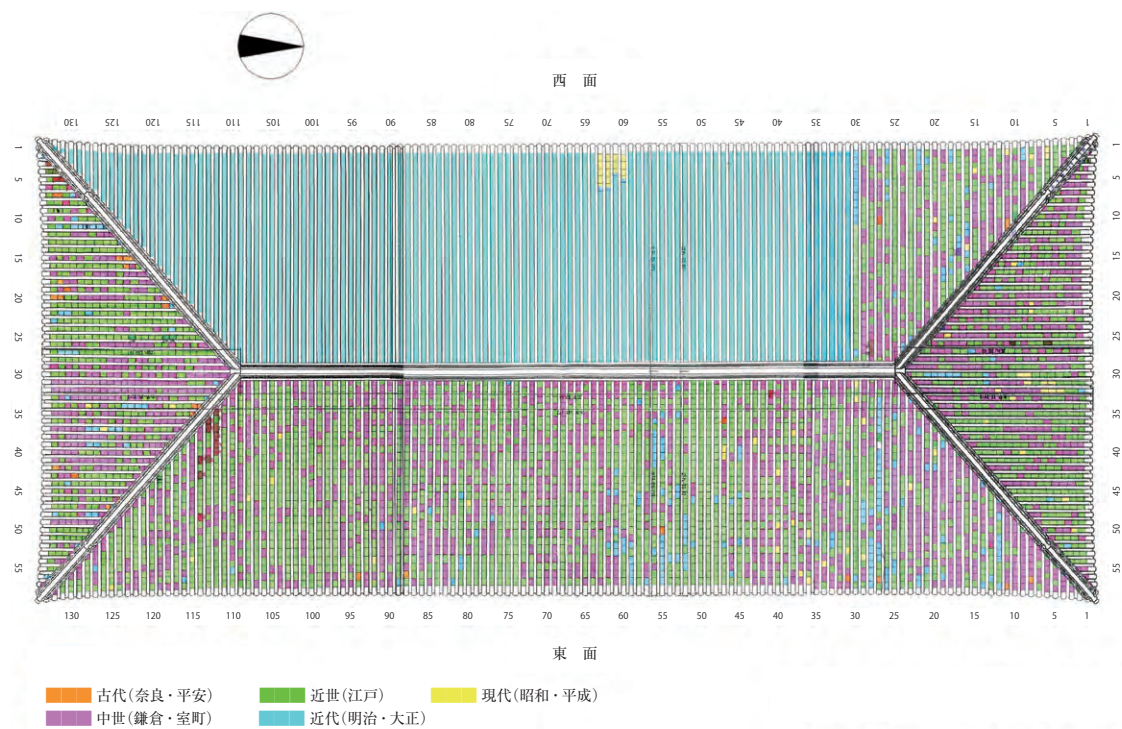


図1 正倉丸瓦時代別分布（解体前）

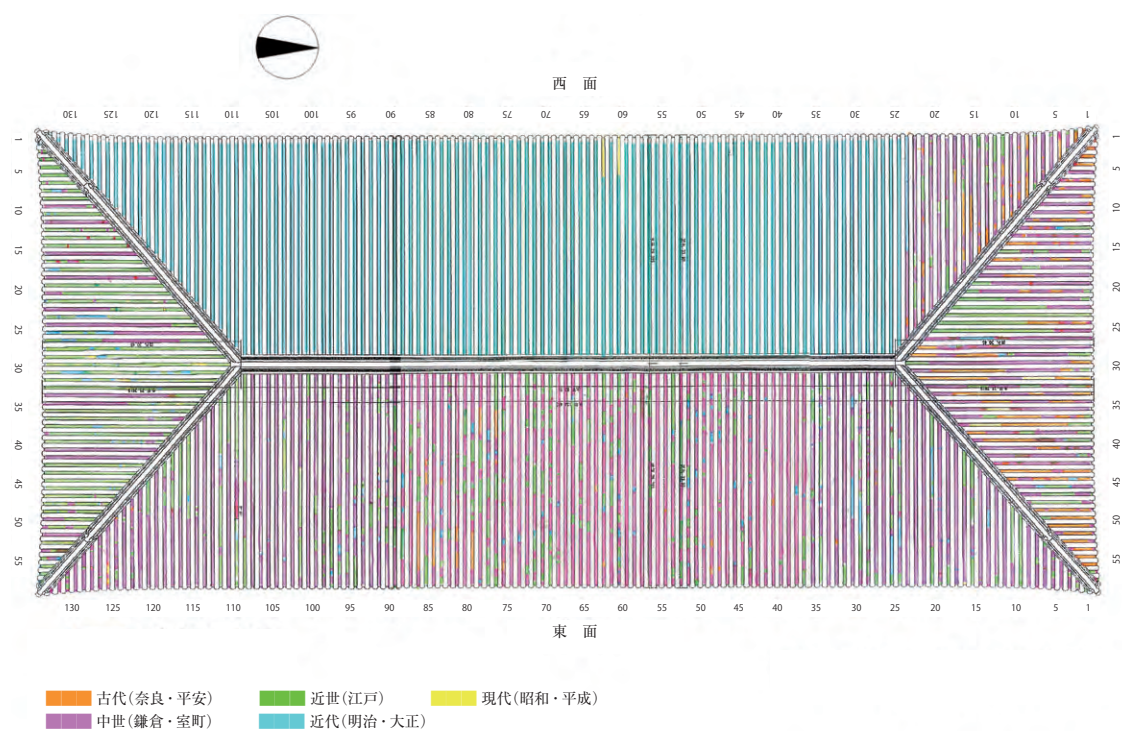


図2 正倉平瓦時代別分布（解体前）

なく城郭・民家への瓦葺の普及が、屋根瓦とその生産体制に変化をもたらした結果、各時代の特徴が瓦の形状や表面調整に差異として表れるからである^(注2)。

分布状況を端的に言えば、丸瓦・平瓦ともに西面の近代部分（大正時代）を除いた四面全てにおいて、同列中そして両隣に異なる時代のものが混在して葺かれた状態であった。一方、軒瓦は西面全てが大正時代、北面は軒丸瓦が明治時代、軒平瓦が大正時代であった。それ以外の東面と南面における軒丸瓦の配列は、江戸時代末期（天保修理）瓦を軸として、間に中世・近世・近代の物を4本あるいは5本挟む。軒平瓦の配列は、同様に江戸時代末期（天保修理）瓦を軸として、交互に中世・近世・近代の物を不規則に挟む形で、軒瓦の配置にも時代の統一性がみられなかった。

ここに述べた古瓦の分布状況は、昭和25年（1950）に施行される文化財保護法以前、明治30年（1897）に制定された古社寺保存法に基づき、前回正倉修理が実施された大正時代の屋根瓦の仕様と推定でき、当時の屋根瓦の保存修理に対する考え方を伝えるものである。

この大正修理は、大正2年（1913）と同10年（1921）の2回実施されたことが明らかにされている^(注3)。そのうち大正10年の仕様書には「一家根瓦ハ古瓦各時代ノ修繕ニ伴ヒ其形状ヲ変エル事無ク一々其位置ニ葺立欠損セルモノハ奈良帝室博物館所蔵創立当時ノ古瓦原型ニ基キ古色ニ擬ヒ新製補足シ主トシテ西流及北流ノ一部ニ使用ス」とあり^(注4)、古瓦は基本的に大正2年修理時の位置に戻されたことが窺える。ただし、今回の調査で確認した鎌倉時代から明治時代の軒平瓦に記された墨書により、若干の移動と、西側と北側に葺かれていた軒平瓦で再用可能なものは、東側などへ移動させられたことが分かった（表1）。

軒平瓦には墨書が良好に残っており、今回の平成修理時に軒瓦に付けた解体番付、例えばN43（北面の西から順に1～57番号付、その43番目）には「西百一六」と「北十六」、E119（東面の北から南に順次1～132番号付、その119番目）には「東六十」・「東十四」といった2種類の墨書が記されていた（表1）。このうち表1の墨書②は、今回の解体番付との位置関係を見

た場合、逆方向から隅軒平瓦を含めた番付位置に該当し、各屋根面の左側を起点とした葺き番付であったことが分かった。

従って、軒瓦への墨書番付の記入は大正2年の解体修理時と判断でき、墨書②は葺き番付で、前述の軒瓦をはじめ丸瓦・平瓦の不規則な配置も、大正2年修理時の葺き仕様であったことが理解できる。

一方、墨書①は解体番付で、明治期修理の屋根葺き状況を示しており、桃

表1 軒平瓦墨書

瓦種	型式	時代	平成修理番付	墨書①	墨書②
軒平瓦	No. 2-1	鎌倉	N43	西百一六	北十六
軒平瓦	No. 2-1	鎌倉	N53		北六
軒平瓦	No. 2-1	鎌倉	S15	六十六	南十六
軒平瓦	No. 2-1	鎌倉	E6	西二十八	東九十七
軒平瓦	No. 8	桃山	E119	東六十	東十四
軒平瓦	No. 8	桃山	N50	東六十四	北九
軒平瓦	No. 8	桃山	N52	東六十五	
軒平瓦	No. 8	桃山	N44	東七十三	北十五
軒平瓦	No. 9	江戸中期	E36	北廿二	
軒平瓦	No. 9	江戸中期	S8	北廿五	
軒平瓦	No. 11	江戸末期	E77	東百・	西五
軒平瓦	No. 11	江戸末期	E24	東百十四	西十
軒平瓦	No. 11	江戸末期	E61	東百	七三
軒平瓦	No. 11	江戸末期	E20	南八	西十四
軒平瓦	No. 11	江戸末期	E18	南十八	西十・
軒平瓦	No. 11	江戸末期	E9	南卅	西二十五
軒平瓦	No. 12	明治	S5	南五十	
軒平瓦	No. 12	明治	E87	南四十	

山時代と江戸時代中期・末期の軒平瓦に記された墨書①からは、明治修理では軒平瓦はほぼ各時代にまとめられて葺かれていたことが推定できる。さらに遡る江戸時代末期（天保修理）の葺き状況は、江戸幕府の大工頭を務めた中井家に残る絵図により、「本瓦葺、瓦足し、元の如く葺替える」といった修理状況が窺え^(注5)、今回確認した丸瓦・平瓦が同列に混在する葺き仕様は、江戸時代から伝統的に踏襲されてきた可能性がある。つまり、これが古社寺保存法下での文化財保存修理における正倉屋根瓦の葺き仕様の手本になったといえるのである。同時に近代以前の屋根瓦修理の実情を伝える貴重な資料と言えるだろう。

2. 丸瓦・平瓦の型式分類による編年と年代観

現在実施される寺院堂舎を対象とした文化財建造物の保存修理の場合、その建立時期が古代であれば、屋根瓦には中世や近世のものが現役で数多く使用されているだけでなく、10回前後の葺き替え修理を受けており、その年代を正確に把握することは困難である。その状況にあって、瓦調査を実施するわけだが、その目的は2つある。1つは瓦の各種類（規格）の員数と年代を知り、建立および修理の時期を知ること。もう1つは屋根瓦として再使用できる規格ごとの員数を算出することである。

その手段として有効なのが、考古学の遺物研究で培われてきた型式分類の手法である。型式分類とそれに基づき編年することで、屋根瓦をほぼ正確に各時代の同一個体群に振り分けることができ、修理年代とその規模を知ることができる。また、文化財保存修理の現場において、再用瓦として葺く際、幅や長さ、谷の深淺をこと細かく確認する手間を軽減することにもつながる。

正倉の屋根瓦葺替修理の年代については、文献史料から奈良時代創建以降、それぞれ確認されてはいるが、中でも鎌倉末期から室町末期の間、約300年間は史料がなく不明な部分が多い^(注6)。そこで、直接の手がかりとなるのが屋根瓦である。

現在の瓦研究は、瓦当文様をもつ軒瓦中心に行われている。軒瓦は考古学における土層や遺構の年代を知る上では重要な指標にはなりえる。しかし、屋根瓦の修理年代を考察する上では、一堂舎に使用される軒瓦の割合は通常全体の約5%にも満たないものであり、資料的にも不十分であり非常に危険を伴う。

それに対して屋根の形態によって多少の増減はあるが、丸瓦は25%、平瓦は55%を屋根瓦全体の中で占めており、丸瓦・平瓦の方がより正確な堂舎の修理時期と、その規模だけでなく、転用の可否までも直接示してくれる。そして、軒瓦の型式編年とその年代の検証、裏づけも可能な客観的資料になる。

そこで今回は、正倉屋根瓦の全体の20%を占める丸瓦と、64%を占める平瓦（軒瓦は全体の2%）に注目して、屋根瓦の年代を推定し、文献史料の裏付けと新たな修理時期の確認、修理規模、そして軒瓦を含む転用の可否までを明らかにしたい。

(1) 型式分類と編年

前述のように、屋根瓦の形状は建築仕様の影響をうけて変化するものであり、この形状の変化と、製作技術の変化から型式分類と編年が可能である。

その特徴が表れる部分として、丸瓦の場合は、丸瓦胴部の狭端幅と広端幅の関係、胴部の長さに対する玉縁の長さやその形状、そして凸面調整の丁寧さの度合いや、各端部の面取り調整の有無とその幅に特徴を見いだせる(図3・4)。具体的には時代が下るに従い、形状では玉縁の長さが短く、玉縁狭端幅や胴部広端幅が狭くなっていく、面取り調整では各端部の面取り箇所が増加し、丸瓦胴部凹面側縁や広端の面取り幅が広くなる(図3)、玉縁凹面側縁では、面取り手法がaからcタイプへと変化する(図4)。

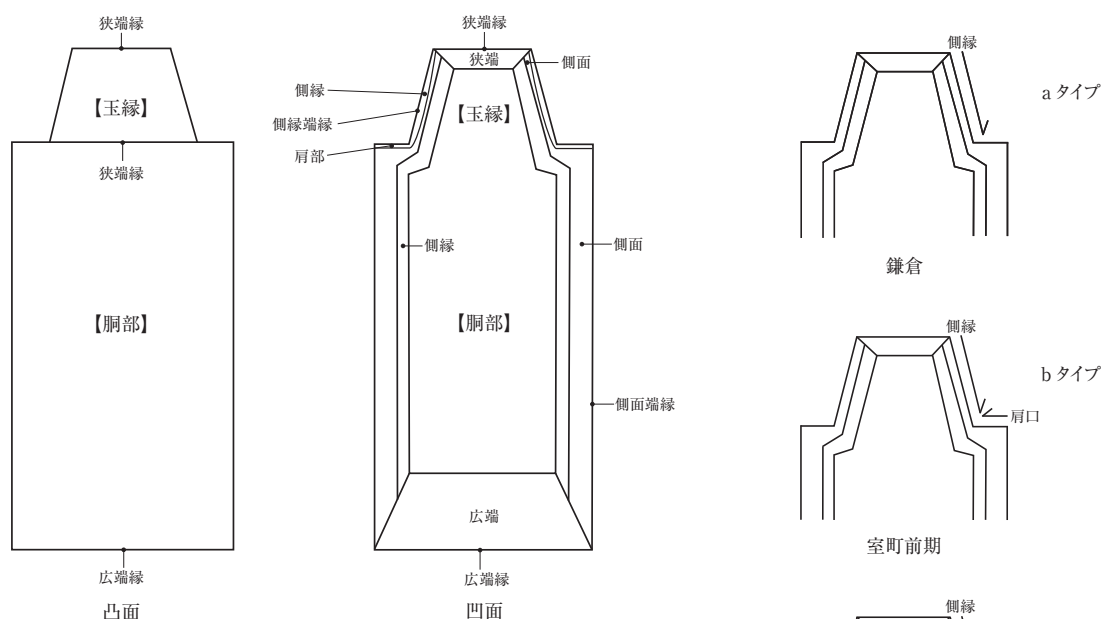


図3 丸瓦面取り調整部分

平瓦の場合は、全長・狭端幅・広端幅の比率と谷(円弧)の深浅、凹凸面調整の丁寧さの度合いや、各端部の面取り調整の有無に特徴を見いだせる。具体的には、その形状は時代が下るに従い全長が短く、狭端幅と広端幅との比率が小さくなり正方形へと近づく。また狭端・広端面の断面形状が外傾斜から垂直、さらに内傾斜に変化する。そして、瓦の仕上げ部分がより丁寧になっていく特徴がみられ、凹凸面の表面のナデ調整や各端部の面取り調整箇所が増加する(図5)。

上記の規格・調整技法に着目し、丸瓦・平瓦の型式分類と編年を行なった。年代観の決定は、次の3項目を参考に行なった。

〔I〕中世・近世瓦の場合は数多くのヘラ書きや刻印による紀年銘が存在するので、それを一つの年代指標としてもちいて、その前後については調整技法の差異から年代の新旧を決定できる。瓦の年代指標は、自身が調査した東大寺・興福寺・元興寺・薬師寺・唐招提寺・法隆寺・當麻寺といった寺院の瓦を参考にした。

図4 玉縁側縁・胴部肩口
面取り調整分類

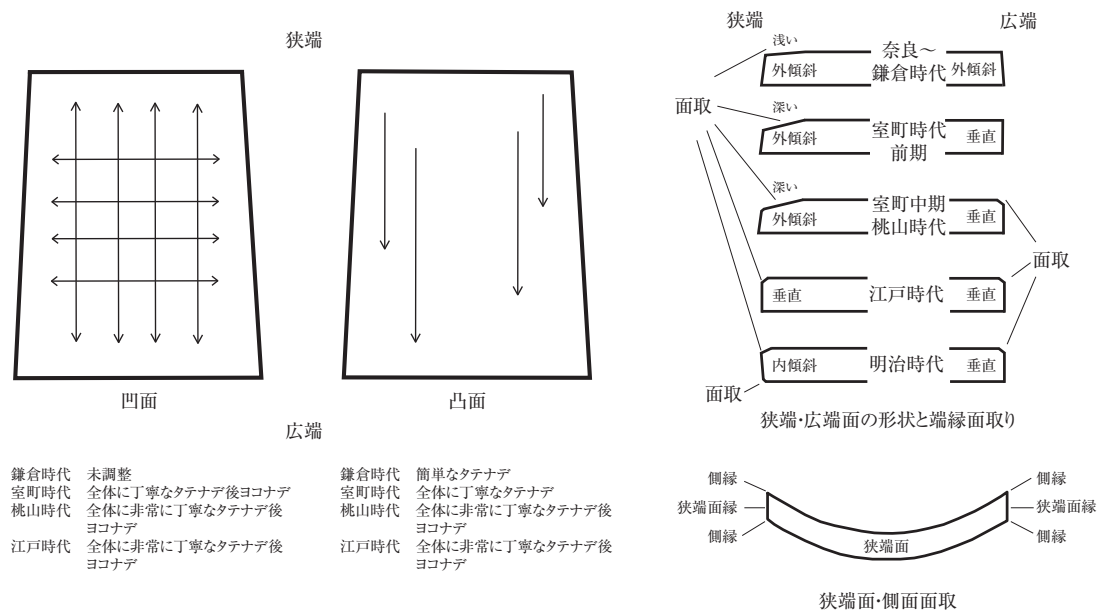


図5 平瓦調整分類

表2 時代区分

瓦型式区分	建築区分	西 暦
A	飛 鳥	593～709
B	奈 良	710～793
C	平 安	前 期 794～929
D		中 期 930～1085
E	鎌 倉	後 期 1086～1184
F		前 期 1185～1274
G	室 町	後 期 1275～1332
H		前 期 1333～1392
I	桃 山	中 期 1393～1466
J		後 期 1467～1572
K	江 戸	1573～1614
L		前 期 1615～1660
M		中 期 1661～1750
N		後 期 1751～1829
O	明 治	末 期 1830～1867
P		1868～1911
Q	大 正	1912～1925
R	昭 和	1926～1988
S	平 成	1989～

表3 正倉時代別瓦員数（解体後）

時 代	丸 瓦	平 瓦
奈 良	105	739
平 安	3	120
鎌 倉	1,043	5,743
室 町	534	670
桃 山	1,023	3,279
江戸中期	426	1,242
江戸後期	26	21
江戸末期	1,036	1,692
明 治	223	382
大 正	2,698	8,726
昭 和	46	43
不 明	2	38
合 計	7,165	22,695

〔Ⅱ〕平瓦の場合、丸瓦と比べ型式変化と時代の対応関係が明確でない部分があるため、丸瓦との同一刻印や対比率（丸瓦広端幅に対する平瓦広端幅の比率1.5～1.7）を参考に年代観を決定する方法をとる（表11）。

〔Ⅲ〕年代をより具体的に決定する参考資料として、屋根瓦の葺替サイクルが70年前後であることや、屋根瓦の修理については、地震・台風などの災害が起こった場合、瓦の破損や落下などが生じ、災害直後に修理が実施される可能性が高く、災害史の視点から堂舎修理の時期を決定する（表10）（注7）。

なお時代区分及び瓦の型式番号は、『国宝・重要文化財建造物目録』の時代区分に倣い、アルファベットによる表記とし、A. 飛鳥、B. 奈良時代と以降順次設定した（時代区分は表2参照）。

（２）各時代の特徴

正倉屋根瓦のうち、丸瓦の総員数は7,165本、平瓦の総員数は22,695枚である（表3）。ここでは各時代の屋根瓦修理に使用された主要個体群を取り上げ、年代判断に関わる部分を中心に説明する。なお丸瓦・平瓦の詳細な寸法や調整部分の変化については、表4・5の特徴一覧、表6・7の計測表にまとめたので、参照しながら読み進めて頂きたい。各期の主要個体については、文末の写真図版に掲載した（型式番号と個体番号を記す）。また、軒瓦については後述するが（表12・13）、必要に応じて言及した。

【奈良時代】丸瓦は2型式105本。B 1（60本）・B 2（45本）があり、B 1は玉縁が短く、取り付け位置が胴部寄りで低く、焼成は硬質である。B 2は逆に玉縁が長く、取り付け位置が胴部端で高く、焼成がやや軟質である。共に円筒を二分割した状態に近く、玉縁と胴部の凸面に縄叩き痕が明瞭に残るが、B 1は玉縁凸面狭端縁・凹面側縁と、胴部凹面側縁に面取り調整を施し、広端の面取り幅が狭いといったB 2との違いがある。

平瓦は2型式739枚。平瓦B 1は粘土板桶巻き作りで、凸面の縄叩き目のうち狭端部のみを板状工具でナデ消す。平瓦B 2は一枚作りで、凸面に縄叩き、凹面狭端・広端・側縁に面取り調整を施す。

その年代は、新薬師寺金堂に供給された荒池瓦窯産の桶巻き作り平瓦を指標とした場合、正倉の桶巻き作り平瓦B 1凹面には「ハ」の字状圧痕がないことから（図24）、730年以降760年以前生産の瓦と推定できる。また丸瓦B 1は、その形状や規格、面取り調整が、荒池瓦窯跡で出土している丸瓦と酷似しており（図21）、平瓦B 1とセット関係にあることから同年代である^{（注8）}。

平瓦B 2は一枚作り平瓦で201枚と平瓦B 1桶巻き作り（538枚）に比べ少ないが、凹面に「東」・「東大」の押印を確認できることから（図6）、東大寺伽藍造営中の製品と考え、正倉創建期（756年頃）に位置づけられる。丸瓦B 2は平瓦B 2とセット関係にあることから、同年代である。

また奈良時代の正倉瓦製作に使用された布袋数は、布綴じ目の違いから判断して、最低でも丸瓦B 1・平瓦B 1共にa～cの3種である（図7）。

【平安時代】丸瓦は整備報告では3本とされていたが、新たに9本を加え5型式12本を確認した。この丸瓦は胴部凹面側面端縁に面取り、胴部凹面広端に幅広い面取り調整を施す点で奈良時代とは異なる。型式編年は玉縁凹面狭端・胴部凹面側縁及び広端の面取り幅に注目すると、①から⑤の順に位置づけができる（表6）。その中で②が5本、④が4本と残存員数が多い。

平瓦は8型式120枚（うち5枚は別途保管にて不明）。全て不再用瓦であったため、金属製パレットに保管されていた。規格と凹凸面に施された成形・調整に伴う痕跡から【Ⅰ】①・②、【Ⅱ】③・④・⑤、【Ⅲ】⑥・⑦・⑧と大きく3分類できる（図8）。その特徴は、【Ⅰ】は凸面

表 4 丸瓦各部特徵一覽

[illegible]

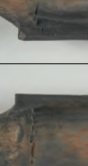
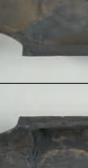
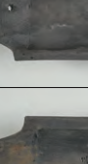
時代 型式	桃山（徳長）	江戸中期前半（元禄）	江戸中期後半（享和）	江戸後期（寛政）	江戸後期（文化・文政）	江戸末期（天保）	明治	大正	大正
	K 1	M 1	M 2	N 1	N 2	O 1	P 1	Q 1	Q 2
巴面写真									
玉縁状端面形	垂直	内向	内向	内向	内向	外向	外向	垂直	垂直
胴部広端面形	垂直	内向	垂直	垂直	若干内向	外向	垂直	垂直	垂直
玉縁面取型	c	c	c	c	c	c	c	c	c
胴部面横断面形	眉型・内向 平坦	眉型・内向 若干連ハの字	眉型・内向 連ハの字	眉型・やや内向 連ハの字	眉型・内向 連ハの字	眉型・内向 連ハの字	眉型・外向 平坦	眉型・外向 ハの字	眉型・やや内向 ハの字
切断面状況（筋目/間隔）	幅広く密 吊り紐	幅狭く疎 170mm間隔	やや幅広いが疎 90mm間隔	極めて幅狭く疎	極めて幅狭く疎	極めて幅狭く疎	不明	不明	極めて幅狭く疎
大きさ	3～4mm2本	不明1本	5mm1本						
垂れ具合	U字80mm前後	U字200mm	15×15	不明	不明	15×16	16×16	4×5	4×4
布目本数（1cmあたり）	11×11	14×14?	縦方向	不明	不明	不明	不明	不明	不明
脚子	縦方向	縦方向	縦方向	不明	不明	不明	不明	不明	不明
内口き数（タテ×ヨコ）				280mm×10mm	270mm×17mm	300mm×15mm	一部280mm×18mm	一部280mm×22mm	280mm×42mm
凸面調整手法	幅10mm 丁寧なタテタテスリ	幅10mm 丁寧なタテタテスリ	非常に丁寧な タテタテスリ ヨコナデ	非常に丁寧な タテタテスリ ヨコナデ	非常に丁寧な タテタテスリ ヨコナデ	非常に丁寧な タテタテスリ ヨコナデ	非常に丁寧な タテタテスリ ヨコナデ	非常に丁寧な タテタテスリ ヨコナデ	非常に丁寧な タテタテスリ ヨコナデ
凸調整具合	車位明瞭	車位明瞭	車位不明瞭	車位不明瞭	車位不明瞭	車位不明瞭	車位不明瞭	全面に布目銀	全面に布目銀
その他特徴	肩口は内向			全面に内向と直	全面に内向と直	全面に内向と直	全面に内向と直	全面に布目銀	全面に布目銀

表6 丸瓦計測表

【単位mm】

No.	型式 番号	時 代	全 長	胴										凸面取幅				凹面取幅													
				長	幅			弧 深			厚			成	形 状	玉 縁			玉 縁			側 面									
					狭端	中央	広端	狭端	中央	広端①	広端②	狭端	狭端縁			狭端縁	狭端縁	側面縁	側面縁	側面縁	側面縁	側面縁	側面縁	側面縁	側面縁	側面縁	側面縁				
1	B 1	奈 良	359	308	166	171	175	71	71	71	20	19	19	89	88	50	b	105	129	14	18	10	7		5	16		7			
2	B 2	奈 良	391	314	173	174	175	62	62	61	20	20	21	83	82	74		103	132	17	18					19		14			
3	D 1 (①)	平安中期	374	315	168	174	174	64	61	60	22	23		83	80	59	a	106	137	19	18	5			6	20		3			
4	D 2 (②)	平安中期	404	343	168	175	175	60	61	66	21	21		78	85	61		98	140	13	16	15			5	15	2	22			
5	D 3 (③)	平安中期	408	358	176	179	175	65	65	56	22	21		84	75	50	a	102	133	13	15				5	17	2	45			
6	E 1 (④)	平安後期	416	342	184	184	184	65	62	59	20	20		84	76	72		100	156	10	12	13			8	16	2	28			
7	E 2 (⑤)	平安後期	404	358	178	181	185	61	68	72	23	23		80	98	46	a	101	147	9	15				14	11	2	25			
8	F 1 a	鎌倉前期	408	327	179	180	180	66	66	64	27	26	24	17	89	87	81	b	108	141	19	17	13		5	10	20	1	52		
9	F 1 b	鎌倉前期	419	337	185	182	186	67	66	64	25	26	24	16	90	85	82	a	106	148	17	19	20			12	19	4	39		
10	F 1 c a	鎌倉前期	421	341	180	180	185	66	66	65	27	26	26	18	89	87	80	b	111	144	20	18	17		8	12	20	3	37		
11	F 1 c b	鎌倉前期	403	333	176	176	183	65	66	62	26	26	25	18	88	85	79	b	107	139	19	19	18		6	11	20	2	41		
12	G 1 a	鎌倉後期	387	323	169	166	169	58	59	61	26	25	24	17	84	84	64	a	97	135	14	20	8			18	16	2	72		
13	G 1 b	鎌倉後期	434	361	178	179	180	63	61	61	27	26	25	17	87	84	73	a	89	141	19	21	19			14	18	1	66		
14	H 3	室町前期	402	337	182	179	182	65	66	66	30	29	28	18	92	93	65	b	102	141	15	23	11	3		4	22	16	2	62	3
15	I 2	室町中期後半	368	304	171	166	164	59	59	59	29	28	26	17	87	84	65	c	96	130	15	21	2	2	2	8	26	11	2	70	4
16	J 1	室町後期	369	309	174	168	161	56	57	57	30	28	27	17	86	83	61	c	94	135	15	22	2			7	26	11	3	68	3
17	K 1	桃 山	385	331	180	178	173	65	64	62	26	27	26	17	92	87	55	c	106	142	17	21	2	2	2	12	20	12	2	58	5
18	K 2	桃 山	404	329	190	185	179	70	68	66	27	26	26	15	98	92	55	c	107	151	16	22			12	23	13	1	54	2	
19	K 3	桃 山	392	336	183	180	176	66	65	62	27	27	27	16	93	88	56	c	106	145	17	21	2	2	2	12	3		53	5	
20	M 1	江戸中期前半	398	344	180	176	172	60	61	60	25	24	23	16	85	82	54	c	107	145	19	20	2	2	2	10	3		34	丸み	
21	M 2	江戸中期後半	331	291	166	161	151	59	57	57	24	23	20	14	79	75	40	c	88	132	16	20	2	5	4	11	4		33	3	
22	N 1	江戸後期	390	347	183	182	178	67	63	62	21	21	21	15	89	81	44	c	90	142	17	16	1	3	2	7	2		33	3	
23	N 2	江戸後期	370	327	183	182	179	69	68	67	20	20	20	13	89	86	43	c	95	144	16	17	1	2	1	7	1		1	30	
24	O 1	江戸末期	380	335	172	174	169	69	68	65	17	16	17	12	85	81	46	c	80	134	17	13	2	4	3	6	2		1	20	
25	P 1	明 治	370	328	163	165	162	60	60	59	20	19	20	11	78	78	43	c	83	133	18	20	1	3	2	7	1		2	33	
26	Q 1	大 正	387	338	180	178	178	67	66	63	22	22	21	11	88	82	49	c	88	143	18	15	4	3	1	12	2		4	29	4
27	Q 2	大 正	386	342	186	186	184	72	70	67	22	24	23	14	92	89	44	c	106	152	16	17	1	4		3		21	5	37	3

※広端①は面取り部手前の厚み

表7 平瓦計測表

【単位mm】

No.	型式番号	時 代	全 長	幅			弧 深			厚				凹面面取幅				凸面面取幅			
				狭 端	中 央	広 端	狭 端	中 央	広 端	狭 端①	狭 端②	中 央	広 端	狭 端縁	狭 端面縁	広 端縁	側 縁	狭 端縁	広 端縁	側 縁	側 面
1	B 1 (布①)	奈 良	374	240	260	284	48	53	52	18		19	21	7						15	10
2	B 1 (布②)	奈 良	371	229	252	276	47	50	48	18		19	20	11						17	7
3	B 1 (布③)	奈 良	373	242	260	276	50	54	52	20		19	19	10						18	6
4	B 2	奈 良	376	229	246	265	43	46	46	20		20	20	9		10	12				
5	D 1 (①)	平安中期	361	230	248	268	36	40	39	16	22	23	23	15			7				
6	D 2 (②)	平安中期	382	256	270	284	36	39	40	15	25	28	25	14			5				
7	D 3 (③)	平安中期	358	249	258	268	39	41	40	15	19	20	19	12			6				
8	D 5 (⑤)	平安中期	368	236	252	262	40	45	43	14	17	20	18	11		10	3				
9	E 1 (⑥)	平安後期	358	244	256	267	38	40	43	19	24	24	24	16			4				
10	F 1 a	鎌倉前期	345	248	259	273	46	47	48	19	22	22	22	19			2				
11	F 1 b	鎌倉前期	346	251	261	274	44	46	48	20	23	23	23	19			2				
12	F 1 c	鎌倉前期	345	250	260	274	45	46	48	20	23	23	22	19			3				
13	F 1 d	鎌倉前期	345	250	259	272	44	46	48	19	22	23	22	20			3				
14	G 1	鎌倉後期	351	249	258	272	43	47	49	19	22	22	22	18			3				
15	G 2	鎌倉後期	338	255	265	276	43	45	50	19	22	23	22	17			6				
17	H 1	室町前期	367	260	271	288	38	41	45	21	25	25	25	11			3				
18	I 2	室町中期後半	334	245	255	270	39	39	42	17	22	22	22	17		2	3				
19	J 1	室町後期	343	252	258	268	39	36	38	17	24	24	22	23		2	3				
22	K 1 (刻④)	桃 山	346	269	277	296	41	41	41	22	26	26	27	9		2	3				
23	K 1 (刻⑤)	桃 山	348	270	279	297	37	34	30	22	26	25	25	11	3	3	4				
24	M 1	江戸中期前半	343	276	284	297	41	37	37	20	22	21	22	6	2	2	3				
25	M 2	江戸中期後半	357	286	298	311	39	37	35	20	22	22	22	4	2	2	4				
26	N 1	江戸後期	305	262	265	272	35	34	32	16	18	18	18	3	2	4	3	2	1	2	
27	O 1	江戸末期	335	284	293	297	39	40	42	19	20	19	18	3	3	2	4	3			
28	P 1	明 治	334	289	295	307	42	42	42	23	24	22	23	3	2	3	3	2	3	1	
29	Q 1	大正2年	340	282	285	297	47	45	47	19	21	21	21	4		2	2	2			
30	Q 2	大正10年	344	284	284	292	46	40	37	20	23	23	24	5		2	1	2			

※狭端②は面取り部手前の厚み

表8 平安時代平瓦計測表

【単位mm】

No.	型式番号	時 代	全 長	幅			弧 深			厚				凹面面取幅				凸面面取幅			
				狭 端	中 央	広 端	狭 端	中 央	広 端	狭 端①	狭 端②	中 央	広 端	狭 端縁	狭 端面縁	広 端縁	側 縁	狭 端縁	広 端縁	側 縁	
1	D 1 (①)	平安中期	361	230	248	268	36	40	39	16	22	23	23	15			7				
2	D 2 (②)	平安中期	382	256	270	284	36	39	40	15	25	28	25	14			5				
3	D 3 (③)	平安中期	358	249	258	268	39	41	40	15	19	20	19	12		7	6				
4	D 4 (④)	平安中期	323	235	240	248	37	40	41	16	18	20	18	12			4				
5	D 5 (⑤)	平安中期	368	236	252	262	40	45	43	14	17	20	18	11		10	3				
6	E 1 (⑥)	平安後期	358	244	256	267	38	40	43	19	24	24	24	16			4				
7	E 2 (⑦)	平安後期	356	230	242	254	32	37	38	16	23	23	23	18			6				
8	E 3 (⑧)	平安後期	317	215	230	240	39	48	50	14	17	18	18	13			5				

※狭端②は面取り部手前の厚み

表9 室町時代平瓦計測表

【単位mm】

No.	型式 番号	時 代	全 長	幅			弧 深			厚				凹面面取幅				凸面面取幅				刻 印
				狭 端	中 央	広 端	狭 端	中 央	広 端	狭 端①	狭 端②	中 央	広 端	狭 端縁	狭 端面縁	広 端縁	側 縁	狭 端縁	広 端縁	側 縁		
1	H 1	室町前期	365	260	271	288	38	40	44	21	25	25	24	11			3					8・9・18・26
2	H 2	室町前期	375	264	277	293	39	40	47	21	26	25	25	9			3					10・11・13・14・15
3	I 1	室町中期	330	235	247	259	38	39	41	17	21	21	21	12		2	4					1・3・5・17・20・23・25
4	I 2	室町中期	334	245	255	270	39	39	42	17	22	22	22	17		2	3					2・4・6・7・12・16・19・21・22・24・27
5	J 1	室町後期	342	250	259	271	41	38	40	17	23	23	21	21		2	3					

※狭端②は面取り部手前の厚み

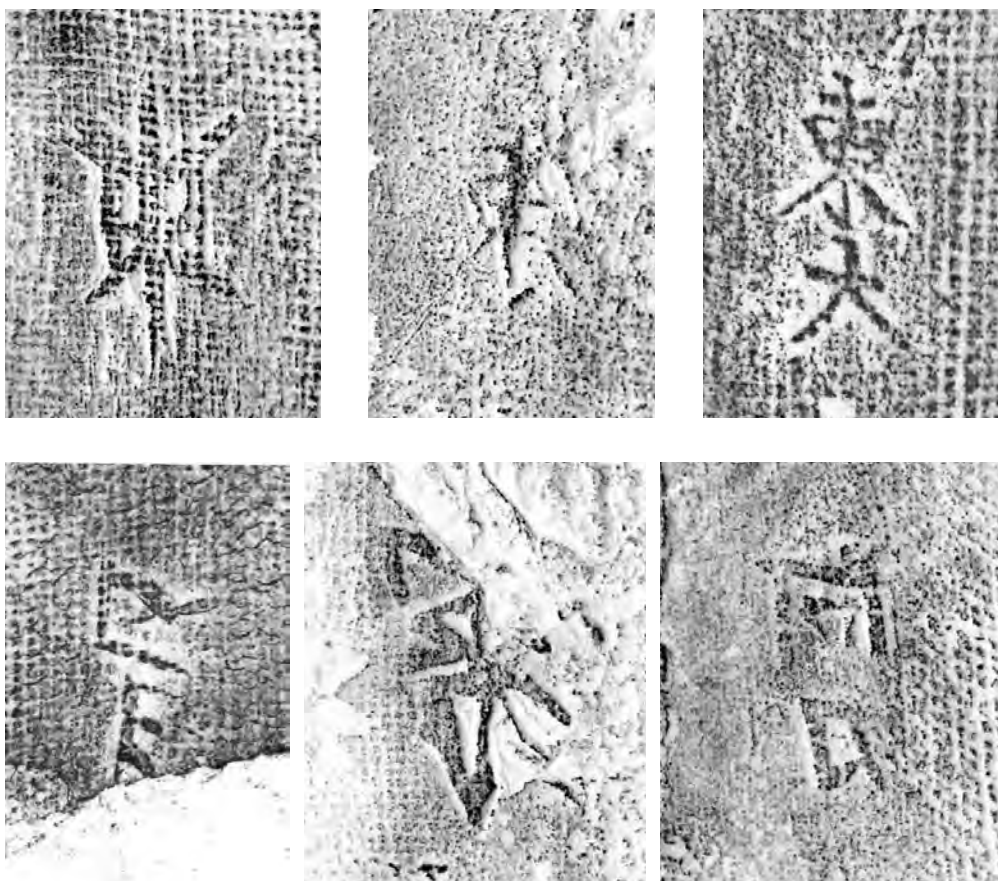


図6 一枚作り平瓦刻印瓦（1：1）

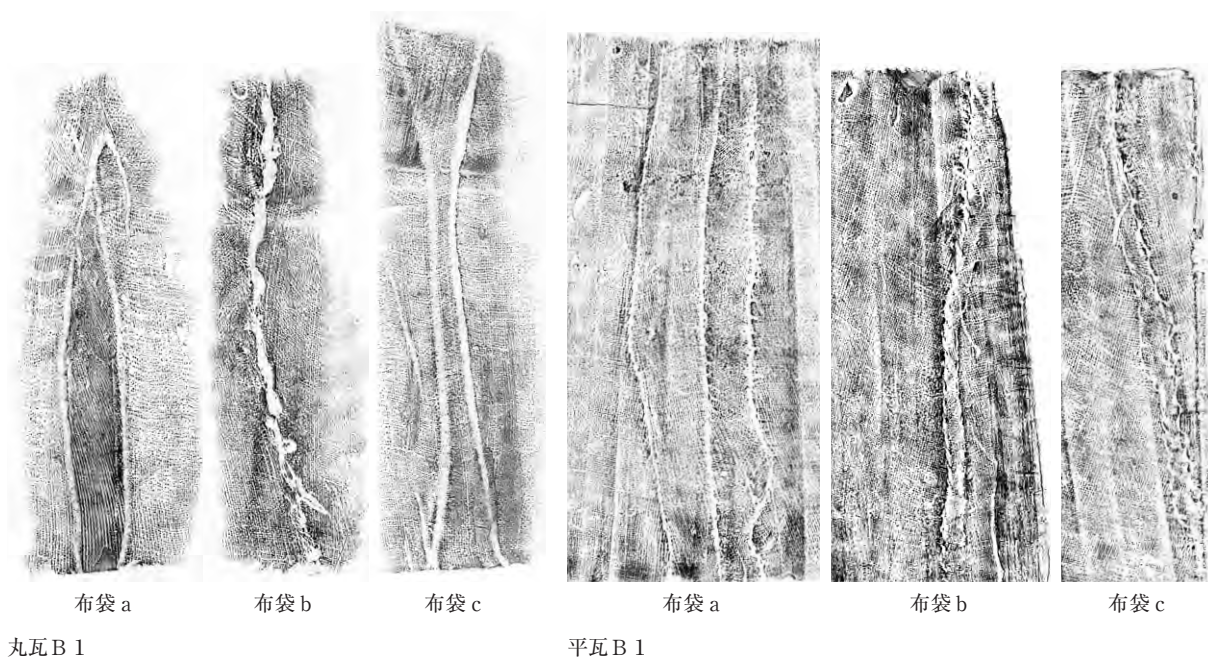
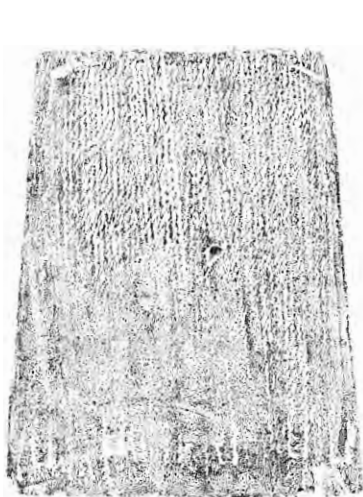
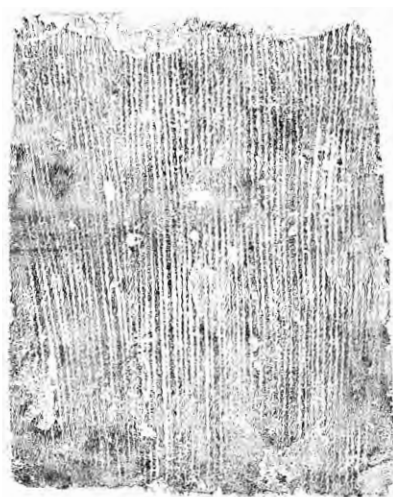


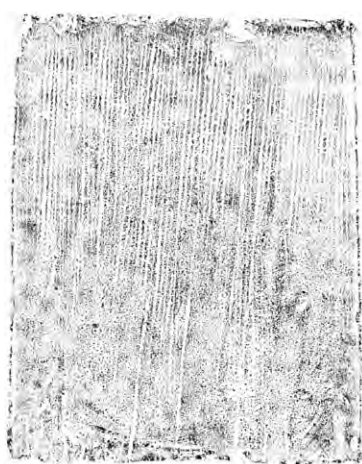
図7 奈良時代丸瓦・平瓦凹面拓本（1：5）



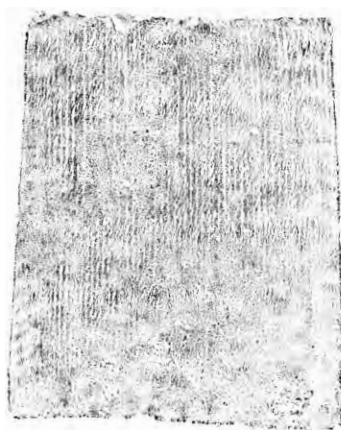
D 1



D 2



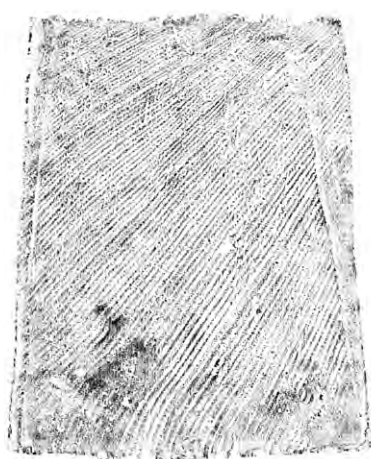
D 3



D 4



D 5



E 1



E 2



E 3

图8 平安時代平瓦凸面拓本 (1 : 6)

に離れ砂、縄叩きは整然と配列（縄目の撚りは粗い）、凹面は細かい布目をもつ。【Ⅱ】は凸面に離れ砂、縄叩きは整然と配列（縄目の撚りは細かい）、凹面は布目と離れ砂の２種類、凹面狭端に角度の浅い面取りをもつ。【Ⅲ】は凹凸面全体に離れ砂と糸切り痕、凹面狭端に角度の深い面取りをもつ。その大雑把な年代は、法隆寺中門や東院、平等院鳳凰堂を参考にすると^(注9)、【Ⅰ】は貞観元年（859）東院修理平瓦と比べ、凸面の縄叩き目が粗く、形状が細長い台形型や長方形型に近いことから平安中期前半。【Ⅱ】は凸面の縄叩き目が細く、凹凸面の離脱剤に離れ砂を使用する特徴が、平等院鳳凰堂の康和３年（1101）修理瓦に類似することから平安中期後半～後期、【Ⅲ】は凹凸面に糸切り痕が明瞭に残り未調整である特徴が、中門と類似し平安後期と推定できる。

員数では③52枚（全長358mm・広端幅268mm）と⑥34枚（全長358mm・広端幅267mm）が最も多く、次に④10枚（全長323mm・広端幅248mm）、そして①6枚（全長361mm・広端幅268mm）、⑦6枚（全長356mm・広端幅254mm）の順となる。

その中で、規格に注目した場合、①・③・⑥は全長・広端幅・谷の深淺（円弧）が同一寸法であり、型式編年から③は①、⑥は③に倣い規格寸法を統一し製作したと考えられる（表８）。ただし、奈良時代の平瓦と比較した場合、全長・広端幅、中央部での谷の深淺など規格寸法差を認めることができ（表７）、ある程度規模の大きな屋根瓦の部分修理が実施され、それに使用されたことが指摘できる。

それに対して、②（４枚）・④（10枚）・⑤（２枚）・⑦（６枚）・⑧（１枚）は員数が少なく、全長・広端幅・谷の深淺（円弧）も①・③・⑥とは異なることから（表８）、④・⑦はごく一部分の修理、同様に②・⑤・⑧は差替え修理に使用されたと判断できる。

上記の事柄と、文献史料を参考にその年代を設定するならば、平安時代における屋根瓦の大規模な修理は1057年が知られ^(注10)、併せて地震災害では1070年には東大寺大鐘落下、1099年興福寺西金堂・塔小破、1177年東大寺大仏螺髪・巨鐘落下など修理を要する災害が起きている（表10）。これらの中で地震規模がM8.0と大きく奈良を含め畿内の各寺院に堂宇被害がみられたのは1099年の康和地震、それ以外は地震規模がM6.0と中規模であったが堂宇被害の記載がなく一部分の修理であったと捉えると、①は971～973年の修理、③は1057年の大規模屋根瓦修理、④は1070年の地震直後か1079年の小修理、⑥は1099年の康和地震直後1100年の大規模修理、⑦は1143年か1177年の地震に伴う小修理と判断できる。

従って、平瓦の時代別型式番号は①がD 1、②がD 2、③がD 3、④がD 4、⑤がD 5、⑥がE 1、⑦がE 2、⑧がE 3となる。

また丸瓦は②と④の残存員数が多いことから、①が971～973年の修理、②が1057年の大規模修理、③が1070年の地震直後か1079年の小修理、④が1100年の地震直後の大規模修理、⑤が1143年か1177年の地震直後の小修理に伴うと判断できる。従って、丸瓦の時代別型式番号は①がD 1、②がD 2、③がD 3、④がE 1、⑤がE 2となる。



元興寺極楽坊



正倉 F 1 b

図9 鎌倉時代前期丸瓦吊り紐

『鎌倉時代前期』丸瓦は1型式4種1,043本（鎌倉後期を含む）。その主要個体は、F 1 a（紐なし）、F 1 b（紐①）、F 1 c a（紐なし）、F 1 c b（紐②）である。

その大きな特徴が、胴部凹面広端の面取り幅が広くなること、そしてF 1 b・F 1 c bの凹面中央には、幅縦1.5mm×横10mmの並縫い状の紐痕跡を横方向に10～15mm間隔で確認できることである。この凹面の並縫い状の吊り紐は、1246年改築の元興寺極楽坊所用丸瓦に（縦2mm×横10mmほどで横方向に並縫い状の細い紐（糸状というのが適切か））確認できる（図9）。

これら4種の年代観は、F 1 c aとF 1 c bの布袋が同一で、前者には並縫いがなく後者には並縫いが2本付与される。ここに時間差を設けた場合、凹面全体が布目痕のみのF 1 a・F 1 c aは13世紀前半で1230年の修理、F 1 b・F 1 c bは13世紀半ば1243～1246年の修理瓦と判断できる。また、奈良時代からこの鎌倉時代前期までが、胴部凹面側面幅が側縁幅に対して2倍の広さをもつ（表6）。

平瓦は1型式4種5,743枚（鎌倉後期を含む）。平瓦は凸面に「東大寺」の銘が、叩き板によって押印され、字体によりa～dの4種類確認できる（図10）。その年代は、平瓦F 1 c型式の叩き板銘が1242～1244年に再建される戒壇院僧房と同範である軒平瓦No.2-2（表13）の凸面に押印されていることが参考になる。しかし、平瓦a～dの4種の規格寸法及び調整は同一であり、そこに年代差を設けることは難しいことから、1230年と1243～1246年の2度の正倉修理に用いられた平瓦群と推定するにとどめる。これらの平瓦に組み合う軒平瓦はNo.2-1・2-2である（表13）。

『鎌倉時代後期』丸瓦は胴部狭端・広端幅の規格寸法10mm以内を同一型式とみなし、吊り紐の本数と規格を基準に分類すると、吊り紐1本をG 1（a・b）、吊り紐2本をG 2（a・b）の2型式4種に分類できる（再調査分68本）。この鎌倉後期は吊り紐の種類が多いわりに個々の員数は少ない。G 1 bは紐の縦幅が鎌倉前期に比べ3mmとやや太くなり、若干弧状に垂れる傾向がみられる。それに対して、G 1 aは紐幅が4mmで、紐を布袋の内外に並縫いし、その比率はほぼ1：1で内外共に弧状を呈し、外側の紐は30mmほど垂れる。

その年代は、太い紐が1268年當麻寺本堂や、1281年薬師寺東院堂と1283年長福寺本堂で確認でき、内外に並縫い状で1：1の比率を示す^{（注11）}。さらに1322年唐招提寺金堂丸瓦を参考にす

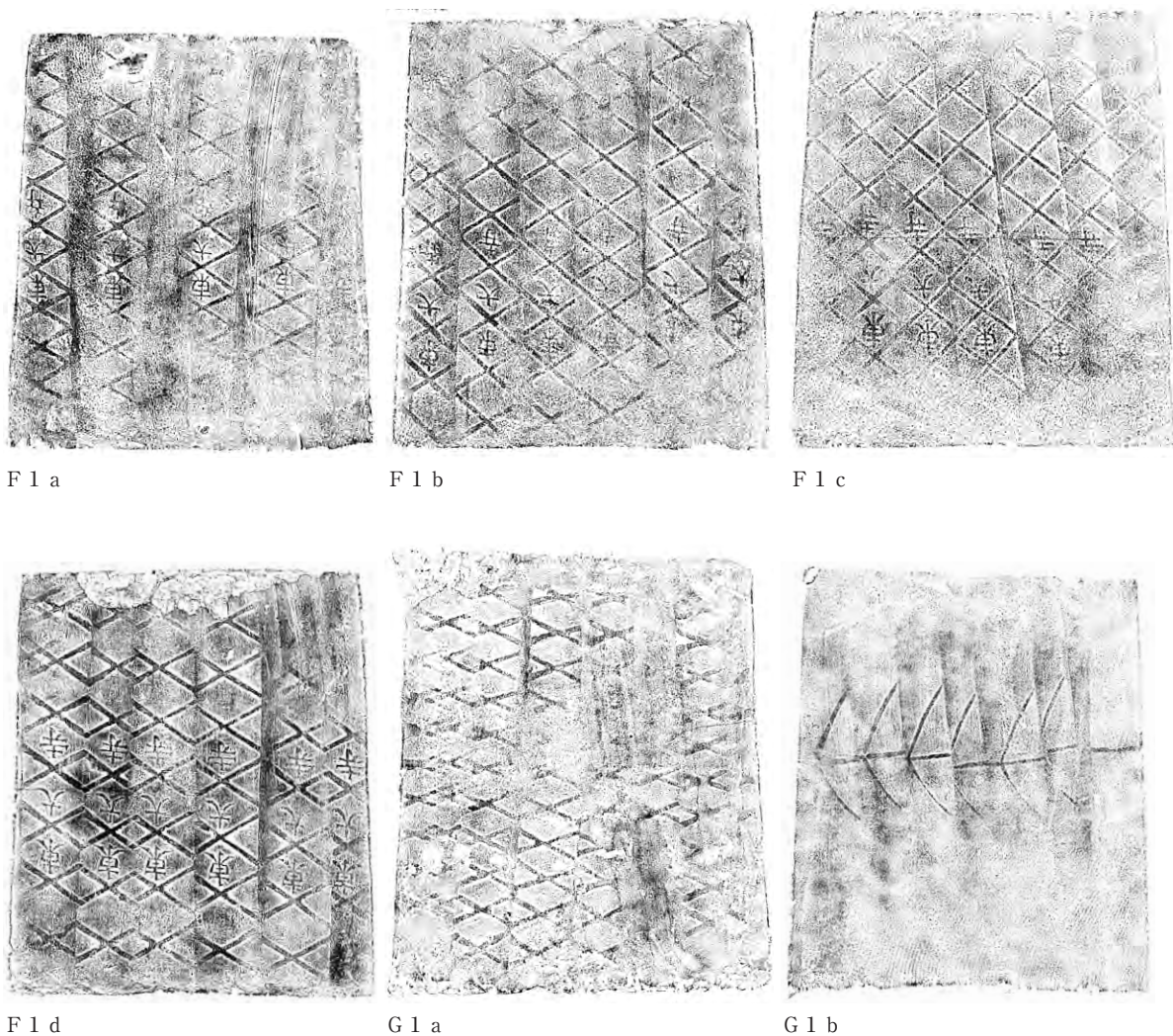


図10 鎌倉時代平瓦凸面拓本（1：6）



図11 鎌倉時代後期丸瓦玉縁形状

るならば、吊り紐は布袋の内側に通すが、外側にする部分が多く、内側に逆U字、外側にU字で緩やかに垂れる紐を確認できる^(注12)。従って、その年代は13世紀後半～14世紀初頭である。

両個体群ともに、玉縁に丸みをもち、胴部凹面側面幅と側縁幅が同じ幅を示すのが鎌倉時代後期の特徴である（図11・表6）。

平瓦はG 1（格子目叩き12種）とG 2（幾何学文様叩き11種）を確認でき、各格子叩きの規格寸法は広端・全長ともに10mm以内に収まり、G 1（260～270mm）とG 2（270～280mm）の2型式である（再調査分85枚）。両個体群ともに凹面は未調整で、成形台との離脱に布や砂を使用することは共通するが、G 2は凸面に施文後ナデ調整を施す点が異なる。また時代の大きな特徴は、凹面狭端の面取り調整が深い角度をもつように変化しており、この変化は法隆寺「文永三年」銘（1266

年) 平瓦や當麻寺本堂「文永五年」銘(1268年) 平瓦に確認できるものである。

従って、丸・平瓦共にその年代は13世紀後半であり、1288年から1299年の地震後の小修理用瓦と判断できる。

『室町時代』室町時代全体で、丸瓦は534本刻印19種、平瓦は670枚刻印27種を確認できる(図12・13)。

まず丸瓦を製作原体(布袋・吊り紐)と、面取りやナデ調整の共通性で分類すると、3群11型式を抽出できる。各調整の分類基準は玉縁凹面側面の有無、玉縁凹面側縁と肩の面取り方法、胴部凸面狭端縁と広端縁の面取りの有無、胴部凹面側面と側縁の対比率、胴部凸面広端のヨコナデ調整の有無で、これを判断基準として型式編年することができる。

①群は玉縁凹面側面をもち、同側縁の面取り方法はbタイプで、胴部凸面調整に丁寧なタテケズリを施すが、所々縄叩き痕を確認できる(3型式H 1～3)。②群は玉縁凹面側面がなく、同側縁の面取り方法はbまたはcタイプで、胴部凸面調整に丁寧なタテケズリを施し、縄叩き痕を確認できない。また胴部凸面狭端縁と広端縁に面取りし、胴部凹面側縁の面取り幅が同側面の2倍から3倍と広い(4型式I 1～4)。③群は玉縁凹面側面がなく、同側縁の面取り方法はcタイプ、胴部凸面狭端縁と広端縁に面取り、胴部凹面の側縁幅が側面の2倍で、胴部凸面広端にヨコナデを施す(3型式J 1～3)。

それぞれの個体群の年代は、①群は玉縁付け根の30mm下から垂れる1本の吊り紐をもち、紐は幅6mmと太く、70mm間隔で布袋の内側に通して小さくU字に35mm垂れる。その年代は、1345年當麻寺本堂軒丸瓦と法隆寺聖霊院応永13年(1406)銘丸瓦を参考にすると、當麻寺本堂軒丸瓦は、玉縁側縁の面取りがaタイプ(図4)で、吊り紐が太く布袋の内側に紐を通すが、その大部分が布袋の外側にでるU字形である。それに対して、法隆寺聖霊院丸瓦は玉縁凹面側面がなく、側縁の面取りはcタイプ(図4)で、吊り紐は布袋の外側に縫い付けられており、異なる特徴をもつことから、14世紀後半である。そして、その貝数から正平16年(1361)の地震直後の修理瓦と判断できる。組み合う軒丸瓦は同一の吊り紐をもつNo.3-1である(表12)。

②群は、玉縁側縁の面取りがcタイプで、胴部凸面に縄叩き痕がないこと、胴部凸面狭端・広端の面取りがある特徴が、法隆寺東院南門長祿3年(1459)や享徳4年(1455)銘丸瓦と同一である。従って、15世紀半ばで、薬師寺金堂や南大門が倒れた1445年の大風、あるいは文安6年(1449)の地震に伴う修理瓦と判断できる。組み合う軒丸瓦はNo.3-2である(表12)。

③群は、②群と特徴が共通するが、胴部凸面広端にヨコナデを施すなど、特徴が異なることから、15世後半で明応3年(1494)の地震直後の修理瓦と判断できる。

平瓦は5型式刻印27種670枚を確認できる。平瓦の型式編年は、規格寸法と凹面狭端縁の面取りの形状、同広端縁の面取り差によって、大きく3つの段階に設定できる(表9)。①群は広端幅290mm前後、全長370mm前後で狭端縁面取りが平行型(2型式H 1・2)、②群は広端幅265mm前後、全長330mm前後で狭端縁と広端縁に面取りを施し、狭端縁が弓型や筐型(2型式I

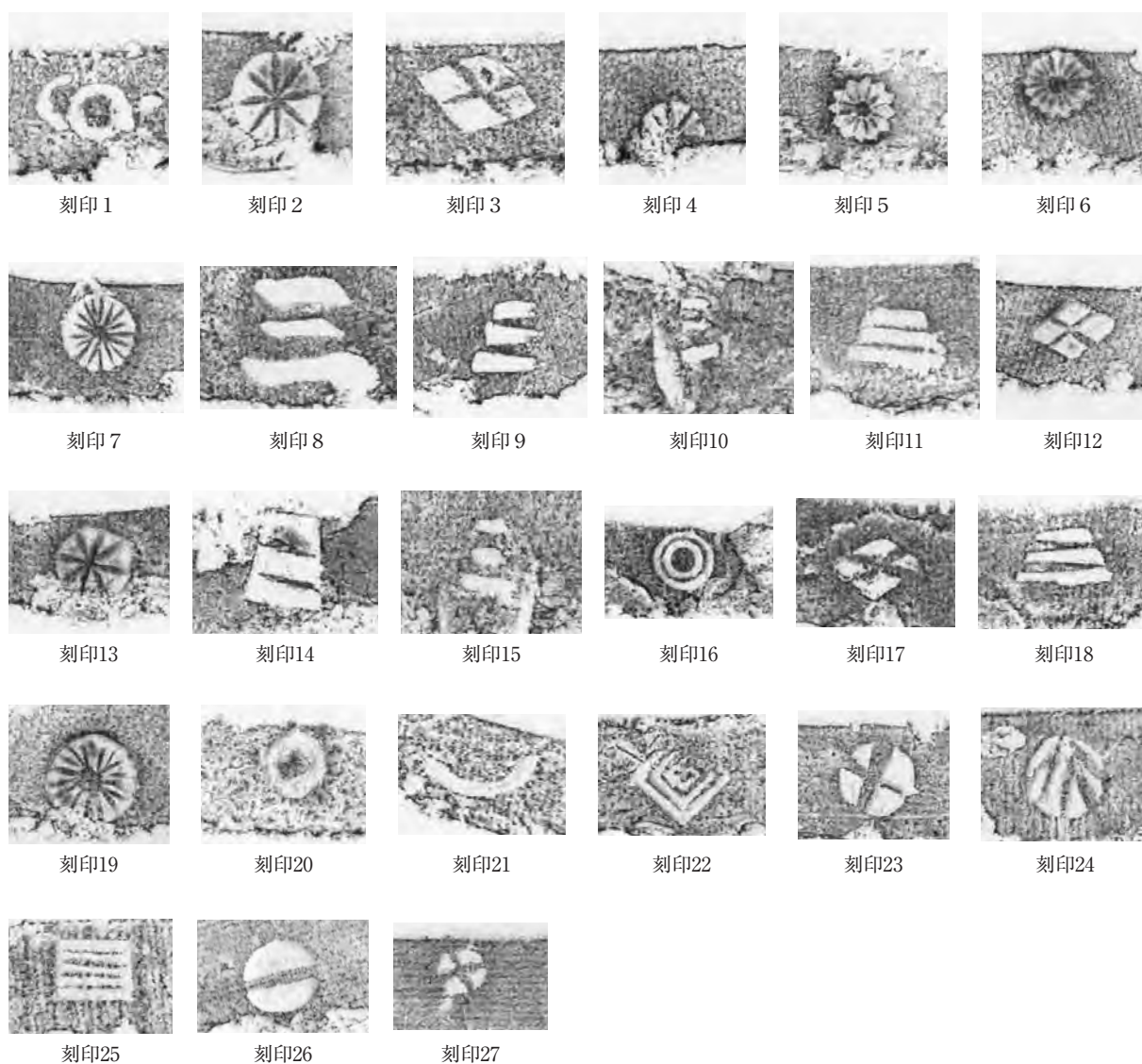


图12 室町時代平瓦刻印拓本（1：1）

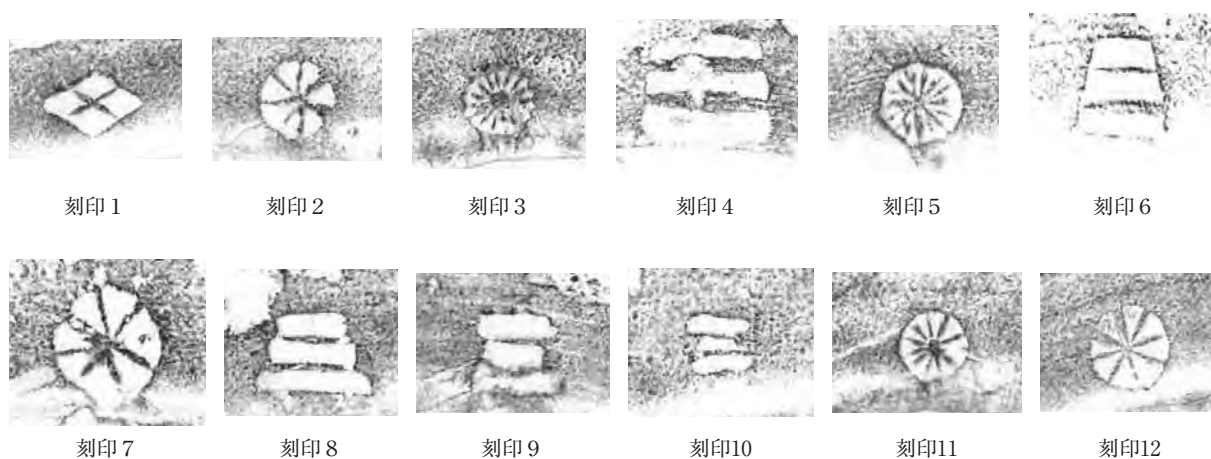


图13 室町時代丸瓦刻印拓本（1：1）



図13 室町時代丸瓦刻印拓本（1：1）（続き）

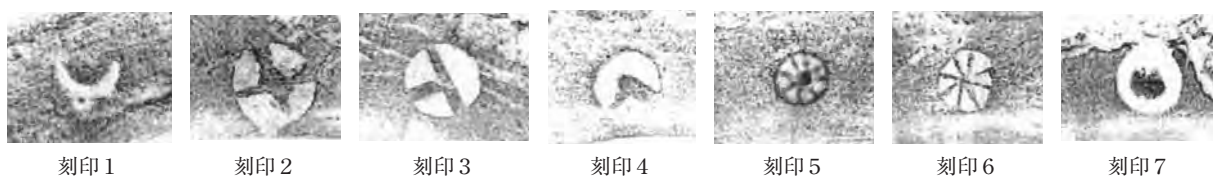


図14 桃山時代丸瓦刻印拓本（1：1）

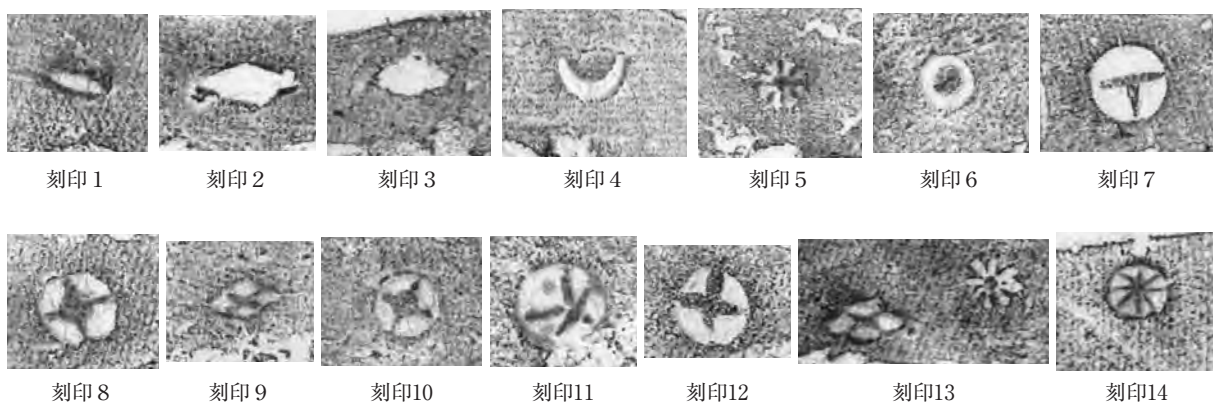


図15 桃山時代平瓦刻印拓本（1：1）



図16 平瓦M2刻印（1：1）

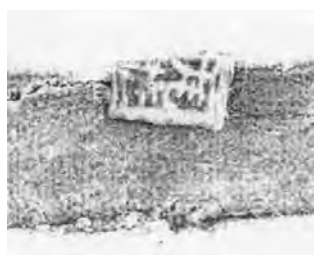


図17 平瓦O2刻印（1：1）



図18 丸瓦N1凹面瓦銘



図19 軒丸瓦No. 10ヘラ書き



図20 丸瓦N2刻印

1・2)、③群は広端幅270mm前後、全長342mm前後で狭端縁と広端縁に面取りを施し、狭端縁が弧状に幅広くなる笹型である(1型式J1)。

その年代は①群の平瓦の刻印8「三」が丸瓦H3刻印19と同一であり14世紀後半。②群は刻印12「菱」が丸瓦I2刻印1と同一であることから、15世紀半ば。③群は凹凸面の表面調整が①・②群より丁寧になり、凹面狭端面取り形状が法隆寺綱封蔵大永4年(1524)銘平瓦と共通することから16世紀初頭で、明応3年(1494)の地震直後の修理瓦と判断できる。②群に組み合う軒平瓦はNo.4・5・6である(表13)。

【桃山時代】丸瓦は1型式刻印7種1,023本である。規格は同一だが吊り紐の形状で11種に分類でき、その中でK1a・K1b・K1cが主体である(図14)。いずれも玉縁と胴部から垂れる2本の吊り紐をもち、紐幅は3～4mmと細く、80mm間隔で大きくU字に70～90mm垂れる。またタテ方向に一単位縦5mm×横1mmの並縫いを縦5mm横10mm間隔で布袋に確認できる。また、室町時代よりも玉縁が短くなり、胴部凹面狭端肩部の面取り幅が広いことなどが特徴である(表6)。

その年代は、胴部凹面狭端肩部の面取りが逆三角形を呈し外向すること、凹面に残る鉄線の粘土切断痕が粗いことなどが法隆寺慶長修理丸瓦の特徴と同一であり、17世紀初頭である(注13)。

平瓦は1型式刻印14種3,279枚を確認でき(図15)、狭端面両端に面取りを施す特徴をもち、刻印4が丸瓦の刻印1と同一であることから、17世紀初頭である。

組み合う軒丸瓦はNo.6、軒平瓦はNo.7とNo.8であるが、平瓦の規格寸法はNo.7に合致する(表12・13)。

【江戸中期】丸瓦は2型式426本、平瓦は2型式1,242枚。丸瓦M1(351本)は胴部凹面全体に丁寧なナデ調整を施し、「元禄六癸酉年六月/南都瓦師次郎兵衛」の銘を押印する。一部の個体では玉縁の付け根から90mmほど大きく垂れる吊り紐、タテ方向の一単位縦5mm×横1mmの並縫いを縦横5mm間隔に確認できる。

平瓦M1(1,227枚)は形状が正方形になり、凹面狭端縁の面取り幅が6mmと狭くなること、狭端面両縁の面取りが一部押圧に変化する特徴をもつ。凸面に丸瓦と同様の銘を押印する。

その年代は、丸瓦・平瓦ともに紀年銘印により1693年である。組み合う軒丸瓦はNo.7、軒平瓦はNo.9である(表12・13)。

丸瓦M2(75本)は胴部凸面に「寶」の刻印を押印する(図16)。凹面には玉縁付け根から30mm下に吊り紐を1本を確認でき、紐は5mmと太く、布袋の外側に80mm間隔で縫い付け、V字に80mm垂れる。また、布袋の補強として、タテ方向の一単位縦5mm×横1mmの並縫いを縦横10mm間隔に確認できる。

平瓦M2(15枚)は凹面や狭端面に「寶」の刻印を押印する(図16)。形状は正方形。

平瓦も同様である。組み合う軒丸瓦はNo.8、軒平瓦はNo.10である(表12・13)。これらの

年代は、丸瓦の玉縁が短く、胴部広端幅が狭くなり和蠟燭型に近づくことや、軒平瓦No. 10の瓦当文様から、18世紀半ばであり、1740年の地震か1765年の大風に伴う修理瓦である。しかし、員数が少なく、規格が異なることから、転用瓦による小修理と判断できる。

『江戸後期』丸瓦は2型式26本、平瓦は1型式21枚である。丸瓦N 1は胴部凹面に「寛政元酉年/坂新屋町住人/瓦師五兵衛」のヘラ書きをもち（図18）、全面に幅10mm×長さ280mmの円弧調整の内叩きを施す。その年代は、紀年銘により1789年である。組み合わせる軒丸瓦は取り付く丸瓦の形態が異なるが、五兵衛の苗字である春田の一字「春」のヘラ書きをもつ軒丸瓦No. 10である（図19・表12）。この寛政期の修理は、元禄修理（1693）から約100年経過しており、経年による瓦の部分的な破損修理と判断できる。

丸瓦N 2は胴部凸面に「三」の刻印を押印し（図20）、胴部凹面全面に幅17mm×長さ270mmの円弧調整の内叩きを施す。その年代は、N 2はN 1より玉縁側縁の曲線率が強く丸瓦O 1に近い特徴をもつことから、19世紀初頭である。

平瓦N 1は「三」の刻印を狭端面にもち、丸瓦N 2と同一刻印であり（図20）、その年代は19世紀初頭である。丸瓦N 2・平瓦N 1は、1802年の地震に伴う修理瓦と判断する。また「三」を使用する瓦師については、19世紀初頭、興福寺旧金堂鬼瓦に、「文政三庚辰年四月 菖蒲池瓦師三郎兵衛」のヘラ書きを確認でき、菖蒲池瓦師三郎兵衛と推定できる。

『江戸末期』丸瓦は1型式3種1,036本、平瓦は2型式3種1,692枚である。丸瓦O 1胴部凹面と平瓦O 1凸面に篆書体で「天保六乙未年/瓦師三郎兵衛」や、楷書体で「天保六年/乙未年瓦工平城住人/三島三郎兵衛富明」の銘を押印する。丸瓦の特徴は、玉縁側縁の曲線率が強く、側縁からの一連の面取りが胴部肩口の一部にとどまる。胴部凹面全面に幅15mm×長さ300mmの円弧調整の内叩きを施す。平瓦O 1は形状が正方形で、凹面狭端・広端縁・側縁、凸面狭端縁、狭端面両縁に面取りを施す。その年代は、丸瓦・平瓦ともに紀年銘印により1835年である。組み合わせる軒丸瓦はNo. 15、軒平瓦はNo. 11である（表12・13）。この天保期の修理は、桃山・江戸中期の大規模な修理を経ていることから判断すれば、古代・中世期の破損瓦を対象とした大規模な差替え修理であろう。

その他、平瓦O 2には「瓦佐」の印を狭端面にもつものがあり（図17）、興福寺東金堂平瓦に「弘化三年瓦佐」のヘラ書き、同北円堂棟札に「嘉永二己酉年十月 瓦師 瓦町住 佐七（後略）」、同大御堂平瓦に「安政三辰年三月上旬 瓦佐」のヘラ書きがあり、同一人物とすると19世紀半ばである。

（3）修理規模の検討

以上が奈良時代から江戸時代末期に至る正倉の屋根瓦修理に関わる丸瓦・平瓦の主要個体である。同時に各期組み合わせる個体である。最後にその規格変化から修理規模を示しておく（表11）。

表10 正倉院正倉・東大寺堂宇修理及び災害年表

		正倉院宝庫修理状況	瓦年代観	東大寺堂宇修理状況	被害地域	地震規模
奈良	745	天平17		大仏の造立開始		
	749	天平勝宝1		大仏の鋳造終わる		
	751	天平勝宝3		大仏殿建立		
	752	天平勝宝4		大仏開眼供養・二月堂創建		
	753	天平勝宝5		西塔に金字最勝王経・銅板勒書を納める・東塔院建立		
	755	天平勝宝7		戒壇院建立、講堂・僧房の用材を造る		
	756	天平勝宝8	聖武天皇の遺愛品、東大寺盧舎那仏に献納	丸瓦B1・B2 平瓦B1・B2	寺領地の山界四至を定め図を作る	
				造東大寺司、瓦3万枚の製造を興福寺に要請		
	758	天平宝字2		食堂造立開始		
	760	天平宝字4		造寺ほほ成り、寺封5千戸の用途を定む		
	763	天平宝字7		大仏の光背を造り始める		
	764	天平宝字8		東塔露盤を構上		
平安	780	宝龜11		瓦19万枚を造り僧房に用いる		
	801	延暦20		北大門建立		
	804	延暦23		西大垣・中大門南大垣を造る		
	855	斉衡2		地震により大仏の頭落ちる		
	887	仁和3			五畿七道	(M8.0-8.5)
	917	延喜17		講堂・三面僧房焼失		
	934	承平4		西塔落雷により焼失		
	935	承平5		講堂及び新仏開眼供養		
	938	天慶1			京都・紀伊	(M7.0)
	962	応和2		講堂焼失		
	971-973	天祿2-4	正倉修理	丸瓦D1 平瓦D1	大僧房・東塔院・戒壇院・講堂・食堂を修理	
	989	永祚1				
	1007	寛弘4		大仏殿裳階修理		
	1009	寛弘6		東塔修理		
	1021	治安1		三昧堂供養		
	1023	治安3		千手堂修理		
	1031	長元4	風損による勅封倉修理			
	1057	天喜5	南倉修理及び屋根瓦修理	丸瓦D2 平瓦D3	食堂廊・食堂・講堂・戒壇院廊等修理	
			勅封倉屋根瓦修理			
	1058	康平1		戒壇金堂・食堂登廊・北中門・西楽門等修理		
	1067	治暦3		大湯屋・三昧堂を建立		
	1070	延久2		大地震により東大寺大鐘落ちる	山城・大和	(M6.0-6.5)
	1079	承暦3	勅封倉修理	丸瓦D3 平瓦D4	食堂・大仏殿東庇修理	
	1091	寛治5			山城・大和	(M6.2-6.5)
	1096	嘉保3		大鐘・塔九輪を落ちる	畿内・東海道	(M8.0-8.5)
	1099	承徳3			畿内・南海道	(M8.0-8.3)
	1100	康和2	勅封倉修理	丸瓦E1 平瓦E1		
	1101	康和3		東塔修理		
	1102	康和4		食堂登廊・大仏殿回廊・楽門修理		
	1116	永久4		大仏殿四面回廊等修理		
	1117	永久5		戒壇院・講堂修理		
	1129	大治4		大仏殿・同廊・講堂修理葺		
	1130	大治5		講堂・北室修理		
	1143	康治2	勅封倉修理	丸瓦E2 平瓦E2		
	1177	治承1		東大寺大仏螺髪・巨鐘落ちる	大和	(M6.0-6.5)
鎌倉	1180	治承4		平重衡の兵火により東大寺中心伽藍焼失		
	1185	文治1		大仏開眼供養	山城・大和・近江	(M7.4)
	1193	建久4	雨漏りのため修理			
	1195	建久6		大仏殿供養		
	1199	正治1		南大門上棟・法華堂修理		
	1203	建仁3		東大寺総供養		
	1204	元久1		東塔造営始まる		
	1206	建永1		二月堂供養		
	1216	建保4		東塔造営再開		
	1219	承久1		国分門供養		
	1223	貞応2		東塔完成		
	1227	嘉禎3		【東塔飾瓦銘】		
	1230	寛喜2	北倉・南倉修理	丸瓦F1a・F1ca 平瓦F1a～d		
	1233	天福1		【戒壇院瓦銘】		
	1236	嘉禎2		講堂を建て始める		
	1239	延応1		大湯屋建つ		
	1242	仁治3		戒壇院僧房を建て始める		
	1243-1246	寛元1-4	勅封倉で雨漏り、修理	丸瓦F1b・F1cb 平瓦F1a～d		
	1244	寛元2		戒壇院僧房成る		
	1254	建長6	北倉に落雷、中倉・北倉修理			
	1256	康元1		真言院再興始まる		
	1264	文永1		法華堂上棟		
	1267	文永4		西南院を造り始める		
	1282-1288	弘安5-正応1		大湯屋・三昧堂・三面僧房・東塔・西塔・大講堂・大仏殿・回廊・戒壇院等修理		
	1288	弘安11	正倉修理	丸瓦G1・G2 平瓦G1・G2		
	1299	正安元年			大阪・畿内	不明
	1318	文保2		東塔修理		

		正倉院宝庫修理状況	瓦年代観	東大寺堂宇修理状況	被害地域	地震規模
室 町	1350	正平 5			京都	(M6.0)
	1361	正平16	丸瓦H 1・3	平瓦H 1・2	畿内・土佐・阿波	(M8¼・8.5)
	1362	正平17			雷火により東塔焼失	
	1373	文中 2		法華堂手水屋修理		
	1398	応永 5		塔事始め・立柱		
	1408	応永15		大湯屋・二月堂湯屋修理		
	1426	応永33		二月堂登廊大破につき造替		
	1446	文安 3			戒壇院焼失	
				戒壇堂・講堂立柱		
	1449	文安 6	丸瓦 I 1・4	平瓦 I 1・2	山城・大和	(M5¼・6.5)
	1460	寛正 1		法華堂北門修理		
	1465	寛正 6		法華堂手水屋修理		
	1474	文明 6			京都で地震	不明
	1494	明応 3	丸瓦 J 1・3	平瓦 J 1	東大寺・興福寺・薬師寺・法華寺・西大寺破損	(M6.0)
	1520	永正17			京都・紀伊	(M7.0・7¼)
	1539	天文 8				
桃 山	1565	永禄 8		南大門瓦葺替		
	1567	永禄10		三好・松永の兵火により、中心伽藍焼失		
	1583	天正 1		大風により不開門倒れる		
	1586	天正13			畿内・東海・東山	(M7.8)
	1596	文禄 5			京都・畿内	(M7¼)
江 戸	1602	慶長 7		戒壇仮堂建立供養		
	1603	慶長 8	徳川家康の命により、正倉修理	丸瓦 K 1	平瓦 K 1	
	1605	慶長10		戒壇院千手堂建立		
	1621	元和 7		二月堂本堂の屋根替始め		
	1632	寛永 9		二月堂食堂・参籠所修理		
	1662	寛文 2			畿内・その周辺	(M7¼・7¾)
	1663	寛文 3	幕府正倉の修理を命ず			
	1666	寛文 6	中倉修理			
	1667	寛文 7		二月堂焼失		
	1669	寛文 9		二月堂上棟		
	1674	延宝 2		法華堂修理始める		
	1681	天和 1		三昧堂再建の手斧始め		
	1691	元禄 4		大佛鑄造成る		
	1693	元禄 6		丸瓦 M 1	平瓦 M 1	
	1707	宝永 4			五畿・七道	奈良で震度6
	1708	宝永 5		大仏殿の再建成る		
	1716	享保 1		中門・南回廊成る		
	1733	享保18		戒壇堂建立供養		
	1738	元文 3		大仏殿回廊成る		
	1740	元文 5		丸瓦 M 2	平瓦 M 2	大和・畿内
	1745	延享 2		鐘樓修理供養		
	1747	延享 4		法華堂・手水屋修理		
	1751	宝暦 1		念仏堂修理		
	1762	宝暦12			戒壇院焼失	
	1765	明和 2		大風により二月堂・食堂破損		
	1783	天明 3		三昧堂修理		
	1786	天明 6		二月堂参籠所修理		
	1789	寛政 1		丸瓦 N 1		
	1793	寛政 5		法華堂手水屋修理		
	1798	寛政10		大湯屋修理		
	1802	享和 2		念仏堂修理		
	1806	文化 3		丸瓦 N 2	平瓦 N 1	春日の石灯籠倒れる
	1818	文政 1		法華堂修理		畿内・名古屋 (M6.5・7.0)
	1819	文政 2		法華堂手水屋屋根修理		
	1830	文政13	正倉の屋根破損			伊勢・美濃・近江 (M7¼)
	1833	天保 4		法華堂北門屋根修理		
	1835-1836	天保 6・7	正倉本体と屋根葺替修理	丸瓦 O 1	平瓦 O 1	

※参考文献 飯田剛彦「正倉院宝庫修理の歴史と自然災害」『正倉院紀要』第38号、2016年
 太田博太郎『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店、1979年
 震災予防調査会『大日本地震史料』巻之三～五、丸善、1904年
 宇佐美龍夫ほか『日本被害地震総覧 599-2012』東京大学出版会、2013年
 石橋克彦「文献史料からみた東海・南海巨大地震（1）14世紀前半までのまとめ」『地学雑誌』第108巻第4号、1999年

表11 丸瓦・平瓦対比率

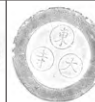
【単位mm】

時 代	型 式	平 瓦	丸 瓦		対比率 丸瓦：平瓦	
		広端幅	①狭端幅	②広端幅	①	②
奈 良	B 1	276	166	175	1.7	1.6
	B 2	265	173	175	1.5	1.5
平 安	D 3	268	169	175	1.6	1.5
	E 1	267	184	184	1.5	1.5
鎌 倉	F 1	273	185	186	1.5	1.5
室町前期	H 1	288	180	178	1.6	1.6
室町中期	I 2	270	170	166	1.6	1.6
桃 山	K 1	297	180	173	1.7	1.7
江戸中期前半	M 1	297	180	172	1.7	1.7
江戸中期後半	M 2	311	166	151	1.9	2
江戸後期	N 1	272	183	179	1.5	1.5
江戸末期（天保）	O 1	297	172	169	1.7	1.8
明 治	P 1	307	163	162	1.9	1.9
大正（2年）	Q 1	297	180	178	1.7	1.7
大正（10年）	Q 2	292	186	184	1.6	1.6

※残存員数の多い型式の平均値を採用した。

表12 軒丸瓦各部特徴一覧

【単位mm】

部位	時 代	鎌倉後期	室町前期			室町中期後半		室町後期	桃山（慶長）	江戸中期前半	江戸中期後半	江戸後期
	型 式	1	2	3・1	3・2	4	5	6	7	8	9	
瓦当	拓 本											
	文 様	左三つ巴	左三つ巴	右三つ巴	右三つ巴	左三つ巴	東大寺大仏殿銘	東大寺銘	東大寺銘	右三つ巴	単弁12弁蓮華	
	珠紋数/間隔	18	23	21	21	23	204	16	184	25	25	
	径	176	182	180	174	164		188		186	194	
	周縁幅	16	20	23	23	18	28	23	30	23	20	
	周縁高	18	15	14	13	11	17	11	6	10	10	
	離脱剤	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	キラ粉	キラ粉	
胴	長	342	337	364	339	-	350	366	372	321	335	
	狭端幅	160	164	188	182	-	194	194	177	167	184	
	広端幅	166	168	178	176	-	194	176	176	167	185	
	狭端弧深	72	55	64	63	-	77	63	60	57	61	
	広端弧深	72	57	72	65	-	74	68	59	59	60	
	狭端厚	20	30	25	30	-	29	30	22	20	24	
	広端厚	20	30	25	30	-	29	28	22	20	24	
玉縁	長	67	50	69	-	-	65	64	50	42	43	
	側縁面取型	a	a	b	-	-	c	c	c	c	c	
全 長		409	387	433	-	-	415	430	422	363	378	

部位	時 代	江戸後期					江戸末期	明 治		大 正
	型 式	10	11	12	13	14	15	16	17	18
瓦当	拓 本									
	文 様	右三つ巴	左三つ巴	法華堂銘	東大寺銘	左三つ巴	東大寺正倉院銘	正倉院銘	左三つ巴	複弁八弁蓮華
	珠紋数/間隔	25	19	26	21		184		27	16
	径	185	180	175					200	196
	周縁幅	27	21	27	27	25	28	32	19	10
	周縁高	10	7	9	10	9	7	9	11	10
	離脱剤	粘土粉	キラ粉	粘土粉	キラ粉	キラ粉	キラ粉	キラ粉	キラ粉	キラ粉
胴	長	356	312	360	374	357	382	371	382	372
	狭端幅	178	166	175	185	193	185	165	178	183
	広端幅	176	174	172	180	185	184	172	188	186
	狭端弧深	62	40	62	60	61	62	59	61	57
	広端弧深	69	54	72	70	72	66	57	63	65
	狭端厚	23	30	18	21	23	19	20	21	20
玉縁	広端厚	23	20	17	21	22	19	20	21	20
	長	40	36	40	45	53	42	37	44	51
側縁面取型		c	c	c	c	c	c	c	c	c
全 長		396	348	400	419	410	424	408	426	423

表13 軒平瓦各部特徴一覧

【単位mm】

部位	時 代	鎌倉前期	鎌倉後期		室町中期前半	室町中期後半		
	型 式	1	2・1	2・2	3	4	5	6
瓦当	拓 本							
	文 様	文字	東大寺銘	東大寺銘	東大寺銘	東大寺銘	東大寺銘	7 葉半戯菊花
	瓦当面離脱剤	離れ砂	唐草 (4単位+子葉)	唐草 (3単位+子葉)	梵字 (オン・ア)			水波
	顎形態	曲線段顎	曲線段顎	曲線段顎	段顎	段顎	段顎	段顎
	周縁幅 (左/右)	13/12	11/12	13/14	11/11	14/14	12/12	15/15
	周縁高	10	10	10	10	10	10	7
	瓦当垂れ幅	70	61	67	70	64	62	62
	瓦当幅	295	270	272	298	278	270	267
胴	狭端幅	257	260	247	266	-	-	254
	広端弧深	53	48	47	48	40	37	38
	狭端弧深	-	40	39	40	-	-	34
	広端厚	32	26	28	26	33	26	30
	狭端厚	30	25	27	22	23	20	24
全 長		367	352	352	362	342	335	335

部位	時 代	桃 山		江戸中期前半	江戸中期後半	江戸末期	明 治	大 正
	型 式	7	8	9	10	11	12	13
瓦当	拓 本							
	文 様	東大寺銘	東大寺銘	東大寺銘	橘文?	文字	無文	均整唐草
	瓦当面離脱剤	きめ細かい離れ砂	きめ細かい離れ砂	きめ細かい離れ砂	粘土粉?	粘土粉?	粘土粉?	きめ細かい離れ砂
	顎形態	段顎	段顎	段顎	段顎	段顎	段顎	段顎
	周縁幅 (左/右)	32/37	48/60	39/32	76/66	47/45	45/36	20/21
	周縁高	6	9	9	7	10	10	5
	瓦当垂れ幅	53	70	71	50	71	73	75
	瓦当幅	289	305	305	315	305	303	300
胴	狭端幅	272	274	280	-	286	288	284
	広端弧深	47	49	37	41	48	47	45
	狭端弧深	41	39	38	-	37	42	49
	広端厚	27	23	23	17	19	22	24
全 長		342	368	342	368	336	338	362

規格寸法では平瓦広端幅や中央部分での谷の深浅に注目すると、平安時代は奈良時代の一枚作り平瓦の広端幅を踏襲するが、谷の深浅が浅く、中には広端幅が20mmも狭いものが存在する（表7）。従って、あくまでも創建当初の部分差替的な修理工事であったと判断できる。鎌倉時代前期は、桶巻き作り平瓦に対応する広端幅をもつが、谷の深浅がやや浅い。しかし、その員数からすると、屋根一面や大部分に及ぶ大規模な修理と判断できる。そして、この鎌倉時代前期の規格寸法を踏襲するのが室町時代であり、その員数からは部分修理と判断できる。桃山時代は、鎌倉時代前期の大規模修理から約350年経過しており、多数の破損瓦が生じていた状況が想像でき、屋根一面や大部分に及ぶ大規模な修理と判断できる。規格寸法は広端幅が300mmに近く、正倉所用瓦で最も幅広い部類に含まれる。江戸時代は広端幅が元禄期・天保期ともに桃山時代に倣っており、桃山時代部分の差替えや鎌倉時代の一系列部分などの修理を主としたものと想像される。その結果、冒頭のような時代が混合した瓦配列に至ったと考えられる。

（4）正倉軒瓦の再検討

丸瓦・平瓦の年代観と規格寸法から軒瓦の転用個体の可能性を指摘しておく（表12・13）。

軒丸瓦No.1は2段の吊り紐をもち、紐幅3mmと細く、布袋の内に25mm、外に40mm並縫いし、緩やかにU字に垂れる特徴から13世紀後半である。これと同じ吊り紐をもつ丸瓦がないこと、

組み合う軒平瓦も現存しないことから、転用瓦である。No.4は中心に梵字の「サク」を置き、その周りに「東大寺大仏殿」銘をもつもので、吊り紐を布袋の外に縫い付け、大きくU字に垂れる特徴から15世紀末である。組み合う丸瓦は存在するが、その員数は僅かであり、ごく一部の部分修理の際の転用瓦である。No.8は「寶」の印をもつ丸瓦と同様の吊り紐をもち、組み合う平瓦M2の寸法が軒平瓦No.10と合致することから、18世紀半ばの修理に用いられたものである。しかし、員数が少なく、規格が異なることから転用瓦である。No.9・11～14は18世紀後半で、対応する丸瓦もなく、また「法華堂」銘など他堂のものが混じっていることから、軒瓦の部分的な差替え修理の際に転用されたものである。

軒平瓦は、No.1は正倉の平瓦広端幅の規格よりも幅広く、その瓦当文様からは13世紀前半の戒壇院所用瓦で、転用瓦である。No.3も同様に正倉の平瓦広端幅の規格よりも幅広く、15世紀前半の転用瓦である。

3. 発見資料及び考察

ここでは瓦製作に伴う痕跡、規格寸法、そして製作年と作者を記す銘文から、奈良時代創建期、鎌倉時代、桃山時代、そして江戸時代における瓦生産と組織について、若干の考察を試みたい。

(1) 奈良時代創建期の瓦生産

【桶巻き作り平瓦】

正倉創建期の瓦と考えられる平瓦B1は、粘土板桶巻き作りによるものである（以下：桶巻き作りと記す）。その特徴は、焼成が良好で、凸面に施された縄叩き調整の狭端部分を130mm程度板状工具にてナデ消す。これに組み合う丸瓦が、同じ良好な焼成で製作された丸瓦B1である。その特徴は、玉縁の取り付け位置が胴部の深い位置にあること、玉縁凹面側縁と胴部凹面狭端肩の面取り調整、そして屋根に葺いた際の丸瓦後部の跳ね上がりを考慮した胴部凹面側面の狭端部付近に面取り調整を施すことである（図3・21）。

丸瓦のこれらの特徴は、興福寺創建期に瓦を供給した梅谷瓦窯と、興福寺・東大寺の瓦窯と



図21 梅谷瓦窯・荒池瓦窯・正倉丸瓦凹面（左より）



図22 荒池瓦窯丸瓦凹面玉縁・胴部側面



図23 熨斗瓦（左：荒池瓦窯 右：正倉）

して知られる荒池瓦窯の両生産品に酷似している（図21）^{（注14）}。両瓦窯の丸瓦を実見したところ、梅谷瓦窯生産品（報告書丸瓦19）は、玉縁の取り付け位置が低く、跳ね上りを考慮した胴部凹面側面狭端部に面取り調整を施す点は共通する。しかし、胴部の厚みが15mmと薄く、胎土に砂礫が多く含まれること、そして玉縁凹面側縁と胴部凹面狭端肩に面取り調整を施さない点が、正倉丸瓦B1よりも古い印象である。

それに対して荒池瓦窯生産品（報告書丸瓦1）は、胎土に砂礫が多く含まれる点が正倉丸瓦B1と異なるが、規格寸法は酷似し、玉縁凹面側縁・胴部凹面狭端肩と胴部凹面側面狭端部付近に面取り調整を施すといった多くの共通点が認められる（図22）。そして、この両瓦窯の丸瓦に組み合う平瓦は粘土板桶巻き作りで、凸面狭端の縄叩き目をナデ消す特徴も共通している。その他、荒池瓦窯では熨斗瓦（報告書熨斗瓦5・6・8）も出土しており、形状は扁平で凸面全体に縄叩き、凹面には糸切り痕と分割線をもつ特徴をもつ。これも正倉の熨斗瓦と規格寸法をはじめ、調整なども酷似するだけでなく、正倉丸瓦B1の胎土に含まれているクサリ礫あるいはシャモットと言われる黒色の粒を含むという共通点が認められる（図23）。

上記の特徴から判断すれば、正倉所用丸瓦B1は荒池瓦窯生産品の可能性が非常に高い。そして、その製作年代は、荒池瓦窯からの供給をうけた興福寺・新薬師寺旧境内で出土する軒平瓦と平瓦の特徴から推定可能である。ただし、荒池瓦窯の規模と全容は不明であり、現時点で明らかになっている資料の範囲内での推論として、その年代観を述べる。

まず奥村茂輝氏によれば、荒池瓦窯が操業を開始した時期は、興福寺の主要伽藍の造営が一段落し、南大門や築地の造営が開始され、桶巻き作りの軒平瓦6671Aが供給される730年代中頃とする。まずここを年代の上限として押さえることができる^{（注15）}。

次に、その下限は、新薬師寺金堂に供給された荒池瓦窯産の軒平瓦と丸瓦から推定できる。新薬師寺金堂は、天平19年（747）に光明皇后が聖武天皇の病氣平癒を願い発願、天平勝宝3年（751）には完成していたとされる。この金堂造営の主体となった屋根瓦は、桶巻き作りで製作された興福寺式軒平瓦6671Jである。その後新薬師寺伽藍整備期における軒平瓦は、桶巻き作りではなく、凸面布目押圧技法で製作された東大寺式軒平瓦6732Fbへと変化する。この軒平瓦6732は、FaとFbの2範が存在し、Fbへの改変時期は天平宝字4・5年（760・761）以前とされている^{（注16）}。

以上を踏まえた上で、正倉創建に関わる桶巻き作り平瓦B1と丸瓦B1の年代を推定すると、重要な判断基準となるのは6671Jに伴う平瓦と丸瓦の製作に伴う特徴である。その特徴は、桶巻きの模骨に彫られ、平瓦の凹面に残る

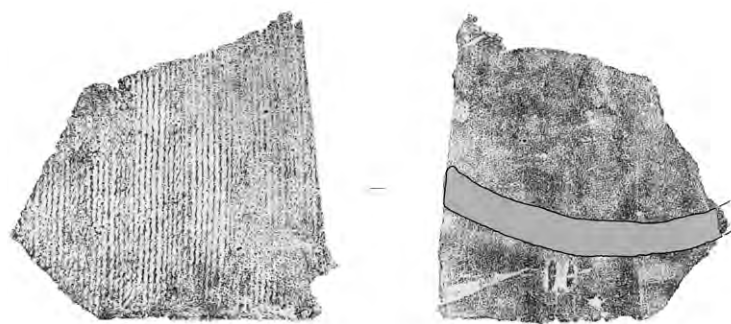


図24 新薬師寺金堂出土桶巻き平瓦「ハ」の字状圧痕（1：5）
注16報告書第38図 平瓦実測図②を一部改変

「ハ」の字状圧痕と、丸瓦胴

部凹面狭端肩に面取り調整をもつ点である（図24）^{（注17）}。さらに、奈良時代における桶巻き作り平瓦の下限は、恭仁宮大極殿造営時のもので745年頃とされることを判断材料にすると、正倉の平瓦には、この「ハ」の字圧痕を一切確認できないこと、丸瓦胴部凹面狭端肩口に面取り調整を持つことから、730年以降751年以前の製作年代が与えられよう。

次に正倉桶巻き作り平瓦の転用の可能性について、若干の考察を試みる。東大寺図書館が所蔵する桶巻き作り平瓦には、法華堂と三昧堂のものがある。法華堂は奈良時代、三昧堂は平安時代の創建だが、現堂舎は江戸時代再建であり、桶巻き作り平瓦は転用瓦ということになる。それぞれの瓦寸法をみると、法華堂で「土師」の印をもつ個体が全長370mm、狭端幅267mm、広端幅300mm、厚み26mm、凸面のナデ消し175mmほどでクサリ礫を含む。三昧堂は8枚ほど計測し、その平均が、全長370mm前後、狭端幅240mm、広端幅280mm、厚み23mm、凸面のナデ消し115mm前後で砂礫を含む。

これらの規格寸法が東大寺伽藍造営で使用された東大寺式軒平瓦（6732型式）に対応するかどうか。そこで東大寺防災工事で出土した東大寺式軒平瓦の瓦当幅寸法を拓本から復元すると、300mmと280mmの2規格に大別でき、法華堂と三昧堂の桶巻き作りの平瓦の広端幅に対応する（表14）。その規格寸法と堂舎別の対応関係は、東大寺式軒平瓦（6732型式）のほとんどが金堂回廊周辺での出土であり、特定は困難である。

しかし、最低でも2種類の規格を認めることができ、これを金堂と回廊での使用を目的とし

表14 東大寺式軒平瓦寸法

防災工事	型式番号	推定瓦当幅(mm)	出土地	備考
301D	6732D	304	金堂	完形
301D	6732D	308	金堂・転害門・戒壇院・食堂	完形
301F a	6732F a	296	金堂・転害門・食堂	
301F b	6732F b	304	金堂・食堂	
301G	6732G	288	金堂・食堂	完形
301H	6732H	300	金堂・食堂	完形
301I	6732I	280	金堂	
301J	6732J	312	南大門・金堂・食堂	
301V	6732V	284	講堂・金堂	完形

た規格寸法での製作とするならば、その違いを認めることができる。これに対して正倉桶巻き作り平瓦B 1の寸法は、260mmと290mmの製品が多いことから、従って、正倉の桶巻き作り平瓦は、当初から正倉用に割り当てられた一群の平瓦と判断したい。

【一枚作り平瓦の刻印】

奈良時代正倉創建期の一枚作り平瓦B 2には、刻印「東」・「東大」・「長」・「家」・「奉」の上半などの存在が整備報告にて報告されている。それに加え今回、図6で示した「東」（上段中央）・「東大」（上段右）・「長」（下段左）・「阿刀」（下段右）の刻印を新たに確認した。「阿刀」以外のそのほとんどが、東大寺防災工事で出土している平瓦の刻印と酷似する。その出土地点は「奉の上半」（防災1826）が大仏殿回廊南東、「東」（上段中央：防災1866）が食堂、「東大」（上段右：防災1879か）が大仏殿南東・同回廊東、「家」（下段中央：防災1805か）が大仏殿回廊北辺で確認されるなど、東大寺創建期に関わる堂宇で用いられた可能性が高く^{（注18）}、正倉の一枚作り平瓦B 2は東大寺伽藍造営に伴う一連の作業の中で生産されたことが窺える。

（2）鎌倉時代の瓦生産

【鎌倉時代前期】この時期（1230～1240年代）には大規模な屋根瓦の葺替修理が実施されている（表10）。その際に使用されたのが、平瓦ではF 1 a・F 1 b・F 1 c・F 1 dの「東大寺」銘の格子叩き文様をもつものと、丸瓦ではF 1 a・F 1 b・F 1 c a・F 1 c bである。その規格は表6・7の計測表を見ると、平瓦では幅・谷の深淺・厚みの各部に至るまで4種類ともほぼ同一の規格を有していることがわかる。一方の丸瓦は平瓦との厚みに差異をもつが、厚み、胴長・胴部幅・弧深・厚みは同一であることがわかる。

正倉の屋根瓦が修理された鎌倉時代前期（1230～1240年代）は、重源による大仏殿・南大門・中門及び回廊、栄西による鐘楼、行勇による東塔や東塔廊の再建が終わった直後だが、つづいて講堂、戒壇院僧房、大湯屋が再建された時期であり、大量の瓦生産が行われていたことは想像に難くない（表10）。

事実、東大寺防災施設工事に伴う発掘調査において、軒平瓦No.2-2（表13）の同范品（図25・防災507B b）は、戒壇院僧房北室、戒壇院講堂西軒廊、法華堂東斜面で確認されている。また、このNo.2-2と同系の文様をもつ図25・防災507Aにはa・

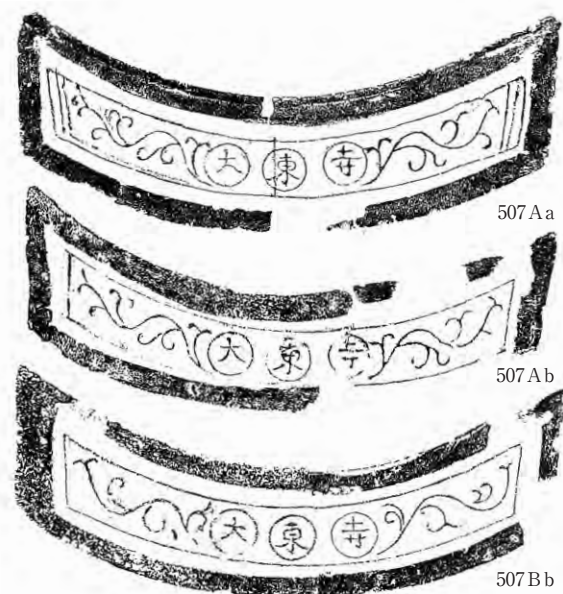


図25 東大寺銘唐草軒平瓦（1：4）
東大寺防災施設工事・発掘調査報告書より転載

bの2範があり、507A a（瓦当幅296mm）は戒壇院僧房北室で大量に、一方の瓦範を切縮めた507A b（瓦当幅250mm）は戒壇院講堂西軒廊の文安焼土層や大仏殿中門南、大仏殿回廊東、法華堂東斜面といった多くの場所で確認されている。

従って、正倉で確認されるNo.2-2の軒平瓦（表13）は、1242年から開始され、1244年に完成する戒壇院僧房再建にて生産供給された軒平瓦であることが分かる。この軒平瓦の瓦当文様は先に再建された戒壇院金堂とは異なる文様であり、戒壇院僧房再建にあたり、新たに創作された瓦当文様で、僧房や付属施設などでは瓦当文様を統一するが、瓦当幅に1.5寸の差を設けて、堂舎規模に対応させたことが窺える。

また、これと同時期に正倉の屋根瓦も修理されており、戒壇院僧房の東大寺銘軒平瓦との共通性が認められ、大量に必要とされる平瓦に関しては、両堂宇の規格寸法を同一にして工期短縮を図ったことが想像されるが、軒平瓦No.2-1（表13）は、正倉専用に生産された可能性がある。

『鎌倉時代後期』丸瓦G1・G2の玉縁に「(」「×」「/」といったヘラ書きがあり、瓦生産に際しての品質管理にともなう記号と推定される（図26）。同時に、この時期には玉縁に釘穴（木釘の可能性が高い）をもつ個体を確認することができる（図26）。これは正倉だけでなく、同じ奈良県に所在する寺院でも同様の特徴が認められる。胴部に釘穴がみられるのは室町時代になってからである。

（3）桃山時代の瓦生産

平瓦は1型式で刻印14種と刻印なし1種の15種、丸瓦は1型式で刻印7種と刻印なし1種の8種を確認できる。まず平瓦は、凹面狭端を筐型、そして狭端面両縁に幅狭い面取り調整を施す共通性をもつ。その規格統一性をみると、全長は350mm前後、広端幅は300mm前後共に±5mm程度、厚みは26mm前後±1mmの誤差内でほぼ統一されている（表15）。これらのうち、広端幅と同様に狭端幅・中央幅でも誤差が生じるのは、焼き歪による谷の深淺（円弧）の変化が原因であり、本来の谷の深淺は40mm（1.3寸）が規格寸法であったと推定する。一方の丸瓦についても厚みは平瓦と共通する（表6）。また一部に、胴部凸面に「×」のヘラ書きをもつ個体があり、これは胴部に釘穴をもつことを示す印として用いられている。

上記の各種瓦の様々な特徴のうち、形状を統一することは、窯入れや運搬、葺きの作業を容



図26 玉縁釘穴・ヘラ書き

表15 桃山時代平瓦計測表

【単位mm】

No.	型式番号	時 代	全 長	幅			弧 深			厚				凹面面取幅				凸面面取幅		
				狭 端	中 央	広 端	狭 端	中 央	広 端	狭 端 ①	狭 端 ②	中 央	広 端	狭 端 縁	狭 端 面 縁	広 端 縁	側 縁	狭 端 縁	広 端 縁	側 縁
1	刻印①	桃 山	358	275	283	295	43	40	36	22	27	27	27	17	2		3			
2	刻印②	桃 山	344	265	273	290	40	37	31	20	24	23	24	17	2	2	3			
3	刻印③	桃 山	346	268	275	296	40	37	29	22	26	24	25	14	3		2			
4	刻印④	桃 山	346	269	277	296	41	41	41	22	26	26	27	9	2	2	3			
5	刻印⑤	桃 山	348	270	279	297	37	34	30	22	26	25	25	11	3	3	4			
6	刻印⑥	桃 山	353	270	278	292	38	36	32	23	27	27	27	13	3	3	3			
7	刻印⑦	桃 山	361	272	282	292	44	41	42	24	27	25	25	13	2	2	2			
8	刻印⑧	桃 山	358	283	293	307	42	44	43	27	28	24	24	4	3	2	3			
9	刻印⑨	桃 山	358	279	285	302	38	35	31	24	27	26	26	12	3		2			
10	刻印⑩	桃 山	354	281	289	309	43	41	39	22	24	23	23	8	3	2	3			
11	刻印⑪	桃 山	341	263	276	296	37	35	32	24	27	25	25	10	3	2	4			
12	刻印⑫	桃 山	353	273	285	304	40	39	40	24	26	26	26	6	2	2	2			
13	刻印⑬	桃 山	370	286	292	308	41	36	34	25	28	25	25	12	2		2			
14	刻印⑭	桃 山	359	284	293	306	45	42	39	25	26	24	25	3	2	2	3			
15	刻印ナシ	桃 山	349	272	281	298	38	38	38	25	26	25	25	8	2	2	3			

※狭端②は面取り部手前の厚み

易にするだけでなく、必要生産枚数に対する原料の粘土量・その購入費用、そして工期の算出を可能にする。また瓦に各刻印を押印させるのは、個人あるいは瓦工房単位での品質管理をはじめ、歩合制による職人の雇用形態を示すものである。

その背景には、大量の人員を投入して短期間で均質かつ一定水準での瓦生産を行うために、作業の効率化を図った結果であり、成形・調整道具の規格化と、各工房内部の構造変化、つまり各作業工程・各種瓦別の分業化と専門化が前代の中世より進んだことを示し、その手法は工場制手工業に通じるものである。

（４）桃山時代（慶長修理）の鬼瓦・鳥衾瓦

【瓦銘】

正倉所用瓦に確認できる「製作年」及び「作者」に関わるヘラ書きや刻印は、表16・17に挙げたものである。

注目すべきは、桃山時代（慶長修理）の鬼瓦・鳥衾瓦と、江戸後期・末期（寛政・天保修理）の丸瓦・平瓦の瓦銘であり、近世奈良における瓦工の系譜を考える上で、重要な情報を提供してくれる。

まず、慶長修理では、7つの残された瓦銘から、奈良「添上郡」・「十市郡」・「添下郡」、遠国では兵庫「播州飾東郡」といった異なる地域から多数の瓦工が集められ、瓦生産に従事させられたことが分かる（表16）。これらは、前述の10数種に及ぶ刻印の存在と共に、この慶長修理が大規模であったことを裏付けるものである。

その中で寄棟造屋根を構成する一ノ鬼・二ノ鬼の瓦銘③・④と、この両鬼瓦と組み合う鳥衾瓦と同一瓦当文様をもつ旧大棟の鳥衾瓦銘③には、「宗左衛門」や「新右衛門家次」といった瓦工の名を確認できる。

この両瓦工の活動拠点は、「西京」・「尻江田（尻枝）」とあり、薬師寺郷の一つ尻江田庄（薬師寺南西にある現在の奈良市七条二丁目付近）をさし、鎌倉時代唐招提寺金堂の鴟尾製作にはじまり、室町時代法隆寺における特殊な瓦作りでも活躍した橘氏に由来する瓦の生産地である。その由緒は、法隆寺大講堂の慶長8年（1603）鳥衾瓦と平瓦銘に新右衛門の息子として、利介あるいは理介の存在が知られるが、彼は慶長11年（1606）法隆寺綱封蔵平瓦に瓦工橘吉重にあやかって「吉重」と名乗るなど、その影響を窺える^(注19)（表17）。

近世期における尻江田の瓦工の系譜は、慶長期以降、寛永期（1638年）の常福寺本堂鬼瓦に「西京五条村」・「宗左衛門」や、正保期（1646年）の薬園寺本堂鬼瓦に「正保三年 タチハナ ノアリソン くミツナ」・「尻江田村 伊岡 七月吉日 五郎介」、延宝期（1678年）の長福寺本堂鬼瓦に「立花之朝臣家次/和州下郡西京瓦大工/北岡五良右衛門」といったヘラ書きがあり、

表16 桃山時代鬼瓦・鳥衾瓦銘

鬼瓦銘①	鬼瓦銘②	鬼瓦銘③	鬼瓦銘④	鳥衾瓦銘①	鳥衾瓦銘②	鳥衾瓦銘③
						
南西二ノ鬼	南東二ノ鬼	北西一ノ鬼	北西二ノ鬼	南西一ノ鬼	南西二ノ鬼	北東二ノ鬼
母屋凸面・右側面	母屋左右側面	母屋凸面	母屋凸面	胴部凸面	胴部凸面	胴部凸面
「于時瓦大工播磨（州）志きたうの郡（飾東郡）中村郷 藤原朝臣又兵衛作」 「東大寺」	「西京」／「喜介」 「慶長八年三月十一日」	「ニシノキヤウ」／「宗左衛門」	「ニシノキヤウ」／「宗左衛門」	「慶長八年癸卯三月廿五日 于時・・・」／「・・・作也」／「同塔土院村・・・」	「慶長八年癸卯三月廿五日 于時瓦大工和州添上郡・・・」／「法華寺村助六同工・・・」 「十市郡・・・弥六也」／「添下郡西京三条村助次郎土打也」	「西京尻江田之住」／「・・・年卯月吉日」／「新右衛門家次」

表17 瓦銘文一覧

	元 号	西 暦	居 住 地	職 名	名 前	寺 院	所 在 地	種 類
桃 山	天正13	1585	西京之住人		新四郎	伝香寺本堂	奈良市小川町	鬼瓦
	天正13	1585	西京尻江田		新四郎	伝香寺本堂	奈良市小川町	鬼瓦
	天正13	1585	西京			伝香寺本堂	奈良市小川町	鬼瓦
	天正13	1585			新三郎	伝香寺本堂	奈良市小川町	鬼瓦
	天正13	1585			与一	伝香寺本堂	奈良市小川町	鬼瓦
	天正13	1585			宗三郎	伝香寺本堂	奈良市小川町	鬼瓦
	慶長5	1600	西京	瓦大工	新右衛門 四十七才子 利助 甚三郎 久七	法隆寺大講堂	生駒郡斑鳩町	烏衾瓦
	慶長7	1602	ワシウカミノコウリ 大クホンケ井チ		フチワラノ チウ ケン三郎	法華寺鐘樓	奈良市法華寺町	鬼瓦
	慶長7	1602	ワシウカミノコウリ 大クホンケ井チ		助六 与八郎 助十郎 甚三郎 弥六 助三郎	法華寺鐘樓	奈良市法華寺町	鬼瓦
	慶長8	1603	西京	瓦大工	新右衛門 四十七才子 利助 甚三郎 久七	法隆寺大講堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	烏衾瓦
	慶長8	1603		タイク	甚三郎 新右衛門 藤十郎	法隆寺大講堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	平瓦
	慶長8	1603	和州添上郡・・	瓦大工				
			法華寺村		助六	正倉院正倉	奈良市雜司町	烏衾瓦
			十市郡		弥六			
			西京三条村	土打	助次郎			
	慶長10	1605	西京	瓦大工	利介 年十六才	法隆寺大湯屋	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	慶長10	1605	西京 後股村	瓦大工	理介 年拾六歳	法隆寺東院廻廊	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	慶長10	1605	西京		理助 慶長四年之年より慶長十年之年まで	法隆寺東院廻廊	生駒郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	慶長10	1605	西京 渡股村	大工	理助	法隆寺東院礼堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	慶長11	1606	渡股村	瓦大工	西京吉重	法隆寺綱封藏	生駒郡斑鳩町法隆寺	平瓦
	慶長		西京尻江田		新右衛門	正倉院正倉	奈良市雜司町	鬼瓦
	慶長		ニシノキヤウ		宗左衛門	正倉院正倉	奈良市雜司町	鬼瓦
江 戸 前 期	元禄6	1620			天下一瓦屋	法隆寺西院西南隅子院築垣	生駒郡斑鳩町法隆寺	軒平瓦
	寛永9	1632			宝生五郎左衛門	東大寺法華堂経庫	奈良市雜司町	烏衾瓦
	寛永9	1632	室生		五郎左衛門	東大寺法華堂経庫	奈良市雜司町	烏衾瓦
	寛永9	1632	南都	棟梁	助作	東大寺本坊経庫	奈良市雜司町	鬼瓦
	寛永9	1632	西京	作者	理右衛門 久左衛門	東大寺本坊経庫	奈良市雜司町	鬼瓦
	寛永9	1632		瓦師	助作	東大寺本坊経庫	奈良市雜司町	鬼瓦
	寛永9	1632		瓦師	助作 久左衛門	東大寺本坊経庫	奈良市雜司町	烏衾瓦
	寛永11	1634	五井村		藤原ノ井工次 左衛門ラクノモン	圓寺仁王門	高市郡明日香村	丸瓦
	寛永15	1638	西京五条村	瓦大工	宗左衛門	常福寺本堂	大和郡山市柳町	鬼瓦
	寛永16	1639			大工 藤原臣久兵衛同孫右衛門甚右衛門	律学院本堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	正保2	1645	和州添下郡西京五条村	瓦大工	宮左衛門	東大寺三昧堂	奈良市雜司町	鬼瓦
	正保3	1646	九条町		五郎介 九兵衛	藥園寺本堂	大和郡山市材木町	鬼瓦
	正保3	1646	尻江田村		伊圓五郎介	藥園寺本堂	大和郡山市材木町	鬼瓦
	正保3	1646	九条町		久左衛門	藥園寺本堂	大和郡山市材木町	鬼瓦
	慶安元	1648	摂津国四天王寺	御大工	藤原朝臣 寺嶋藤右衛門	長谷寺本堂	板井市初瀬	平瓦
	慶安元	1649	摂津大坂子天王寺		藤原朝臣 寺嶋摂津守 手代善尾小左衛門 辻本仁兵衛	長谷寺本堂	板井市初瀬	鬼瓦
	慶安元	1650	山城国		藤原朝臣 寺嶋摂津守内 井上善兵衛	長谷寺本堂	板井市初瀬	鬼瓦
	慶安3	1650	五位村			今西家住宅	奈良県橿原市今井町	鬼瓦
	慶安3	1650			藤わらノ五郎右衛門	松尾寺本堂	大和郡山市山田町	鬼瓦
	慶安3	1650			篠原太郎左衛門	藥師寺南門	奈良市西ノ京町	鬼瓦
	慶安4	1651	西京	大工	たち花あつそん西京瓦大工五郎右衛門	法隆寺弥勒院表門	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	慶安4	1651	西京	大工	五郎右衛門	法隆寺弥勒院表門	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	承応2	1653	四天王寺	瓦師	長右衛門・甚左衛門・吉兵衛・太郎兵衛	万法寺本堂	宇陀市大宇陀小出口	烏衾瓦
江 戸 中 期	寛文2	1662			左兵衛	豊田家住宅主屋	奈良県橿原市今井町	鬼瓦
	寛文9	1669	郡山内九条町		久左衛門	常福寺鐘樓	大和郡山市柳町	鬼瓦
	寛文11	1671	南都西手掾金長町		藤原朝臣	正倉院持仏堂	奈良市雜司町	鬼瓦
	延宝5	1677	和州下郡西之京 尻江田之庄	瓦大工	藤原朝臣 家次 五郎右衛門吉定	法起寺三重塔	奈良県斑鳩町三井	鬼瓦
	延宝5	1677	西之京 尻江田	瓦大工	五郎右衛門	法起寺三重塔	奈良県斑鳩町三井	鬼瓦
	延宝5	1677	西之京 尻江田之庄	瓦大工	五郎右衛門	法起寺三重塔	奈良県斑鳩町三井	鬼瓦
	延宝5	1677	西之京 尻江田ノ庄	瓦大工	五郎右衛門 与次兵衛	法起寺三重塔	奈良県斑鳩町三井	鬼瓦
	延宝5	1677	西ノ京	瓦大工	瓦大工五郎右衛門 西ノ京 与次兵衛	法起寺三重塔	奈良県斑鳩町三井	鬼瓦
	延宝5	1677	西ノ京 尻江田ノ庄	瓦大工	五郎右衛門 与次兵衛	法起寺三重塔	奈良県斑鳩町三井	鬼瓦
	延宝5	1677	西ノ京 尻江田	瓦大工	五郎右衛門 与次兵衛	法起寺三重塔	奈良県斑鳩町三井	鬼瓦
	延宝5	1677	西ノ京 尻江田ノ庄	瓦大工	五郎右衛門 西ノ京与次兵衛	法起寺三重塔	奈良県斑鳩町三井	鬼瓦
	延宝6	1678	和州下郡西京	瓦大工	北園五右衛門	長福寺本堂	生駒市俣口町	鬼瓦
	延宝6	1678	西京尻枝	瓦大工	北園五右衛門	長福寺本堂	生駒市俣口町	鬼瓦
	延宝6	1678	七条村	瓦屋	五郎右衛門	長福寺本堂	生駒市俣口町	丸瓦
	延宝8	1680	和州高市郡 曾我村	瓦屋	左兵衛	光寺寺本堂	橿原市曾我町	鬼瓦
	延宝9	1681	南都包永町	瓦師	藤原朝臣三本清左衛門	東大寺三昧堂	奈良市雜司町	鬼瓦
	天和2	1682	京大仏かわら町東ふち		四郎兵衛	東大寺勧進所経庫	奈良市雜司町	平瓦
	貞享4	1687	包永町	瓦大工	藤原朝臣三本清右衛門	東大寺勧進所経庫	奈良市雜司町	鬼瓦
	貞享5	1688		瓦師		順行寺脇門	吉野郡下市町下市	鬼瓦
	元禄2	1689		法隆寺瓦大工	橘朝臣	法隆寺東院四脚門	生駒郡斑鳩町法隆寺	烏衾瓦
	元禄3	1690			橘丞吉長	法隆寺食堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄3	1690		法隆寺瓦大工	與次兵衛尉 橘吉長	法隆寺食堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄3	1690		法隆寺瓦大工	與次兵衛尉 橘吉長	法隆寺食堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄3	1690		法隆寺瓦師	與次兵衛丞 橘吉長	法隆寺食堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	軒丸瓦
	元禄3	1690		法隆寺瓦大工	與次兵衛尉 橘吉長	法隆寺食堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	烏衾瓦
	元禄3	1690		瓦大工	與次兵衛	法隆寺食堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	平瓦
	元禄3	1690		瓦大工	與次兵衛	法隆寺食堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	元禄3	1690		法隆寺瓦大工	与次兵衛尉 橘吉長	法隆寺東院廻廊	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄4	1691	橿垣本村	瓦師	藤原朝臣吉兵衛家次	順行寺脇門	吉野郡下市町下市	鬼瓦
	元禄4	1691	大和国添上郡 南都菖蒲池町		山田四郎兵衛	淨照寺本堂	大和郡山市北大工町	鬼瓦
	元禄4	1691		法隆寺瓦大工	与次兵衛尉 吉長	法隆寺綱封藏	生駒郡斑鳩町法隆寺	軒丸瓦
	元禄4	1691		法隆寺 瓦大工	与次兵衛尉 橘吉長	法隆寺東院廻廊	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄5	1692	田原本		善四郎	長谷寺陀羅尼堂	板井市初瀬	鬼瓦
	元禄5	1692	三輪新町	瓦屋	佐平次	長谷寺陀羅尼堂	板井市初瀬	鬼瓦
	元禄6	1693	南都	瓦師	次郎兵衛	正倉院正倉	奈良市雜司町	丸・平瓦
	元禄6	1693	西京尻江田	瓦大工	長左衛門	秋篠寺本堂	奈良市秋篠町	鬼瓦
	元禄6	1693	五条村	瓦師	鈴木小右衛門清貞	唐招提寺金堂	奈良市五条町	鬼瓦
	元禄6	1693		瓦師	鈴木治兵衛	唐招提寺金堂	奈良市五条町	鬼瓦
	元禄8	1695		法隆寺瓦大工	橘吉長	法隆寺上御堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄9	1696		瓦大工	橘吉長	法隆寺大湯屋	生駒郡斑鳩町法隆寺	平瓦
	元禄9	1696		法隆寺瓦大工	橘吉長	法隆寺大湯屋表門	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄9	1696		法隆寺瓦大工	橘吉長	法隆寺大湯屋表門	生駒郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	元禄9	1696		瓦師	茂石門	法隆寺大講堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	軒平瓦
	元禄10	1697			石見揀 橘義永	法隆寺経藏	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄10	1697		法隆寺瓦大工	橘吉長	法隆寺経藏	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄10	1697		法隆寺瓦大工	石見揀 橘吉長	法隆寺鐘樓	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄10	1697		法隆寺瓦大工	橘吉長	法隆寺鐘樓	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄10	1697			橘吉長長谷口石見揀	法隆寺大講堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	平瓦
	元禄10	1697			谷口石見揀口	法隆寺東院夢殿	生駒郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	元禄10	1697			橘吉長長谷口石見揀	法隆寺西院大垣	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄10	1697			橘茂長石見揀	法隆寺西廻廊	生駒郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	元禄10	1697		法隆寺瓦大工	橘吉長石見揀	法隆寺東廻廊	生駒郡斑鳩町法隆寺	平瓦
	元禄11	1698	三本松	法隆寺瓦大工	橘谷口石見揀 子治右衛門 半兵衛	法隆寺東院礼堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	元禄11	1698		法隆寺瓦大工	橘吉長 谷口石見揀	法隆寺東院廻廊	生駒郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	元禄11	1698		法隆寺瓦師	橘吉長石見揀	矢田座久志玉比古神社	大和郡山市矢田町	獅子口
	元禄		和州阿比薄山 あきしの瓦			秋篠寺金堂	奈良市秋篠町	平瓦
	元禄		今井町		瓦市兵衛	東大寺金堂	奈良市雜司町	平瓦
	宝永2	1705		瓦大工	半兵衛 橘吉永	福園院本堂	生駒郡斑鳩町法隆寺	丸瓦

	元 号	西 暦	居 住 地	職 名	名 前	寺 院	所 在 地	種 類
江戸 中期	宝永4	1707			瓦細工石見 作右衛門 吉兵衛	法隆寺大湯屋表門	生胸郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
					石兵衛 甚兵衛 長三郎 八兵衛 □□□			
	宝永5	1708	柳六丁目	瓦屋	安兵衛	常福寺本堂	大和郡山市柳町	鬼瓦
	宝永8	1711	高天市	瓦師	長次良	東大寺中門	奈良市雜司町	丸瓦
	正徳2	1712	依本	瓦師	善四郎	長岳寺様門	大埋市柳本町	鬼瓦
	正徳2	1712			橘吉長谷口石見縁	律学院本堂	生胸郡斑鳩町法隆寺	烏衾瓦
	正徳3	1713	瓦町		伝七	安楽寺本堂	橿原市葛本町	鬼瓦
	正徳4	1714	南都	諸瓦請負棟梁	三嶋三郎兵衛	東大寺中門	奈良市雜司町	鬼瓦
	正徳4	1714		諸瓦請負棟梁	三嶋三郎兵衛	東大寺中門	奈良市雜司町	鬼瓦
	正徳4	1714		瓦師	三嶋三郎兵衛	東大寺本坊経庫	奈良市雜司町	鬼瓦
	正徳6	1716		御瓦請負人	三嶋三郎兵衛	東大寺廻廊	奈良市雜司町	平瓦
	享保4	1719	南都菖蒲池町		三嶋三郎兵衛	東大寺西廻廊	奈良市雜司町	鬼瓦
	享保4	1719		諸瓦請負人	三嶋三郎兵衛	東大寺西薬門	奈良市雜司町	鬼瓦
	享保7	1722	菖蒲池町	□□請負人	三嶋三郎兵衛 平七	東大寺東廻廊	奈良市雜司町	鬼瓦
	享保7	1722		瓦請負人	三嶋三郎兵衛	東大寺東廻廊	奈良市雜司町	鬼瓦
	享保13	1728		瓦師	三郎兵衛	東大寺西廻廊	奈良市雜司町	鬼瓦
	享保14	1729		法隆寺瓦師	谷口飛騨棟構尚政	宝珠院本堂	生胸郡斑鳩町	鬼瓦
	享保16	1731		瓦師	三嶋三郎兵衛	東大寺法華堂経庫	奈良市雜司町	平瓦
	享保20	1735		大仏中門御瓦請負棟梁	三嶋三郎兵衛	東大寺東廻廊	奈良市雜司町	軒丸瓦
	享保20	1735		大仏殿諸瓦請負人	三嶋三郎兵衛	東大寺東廻廊	奈良市雜司町	丸瓦
	享保21	1736	河原屋村	瓦師	勘兵衛	吉永神社書院	吉野郡吉野町	鬼瓦
	元文2	1737		諸瓦請負棟梁	三嶋三郎兵衛	東大寺東廻廊	奈良市雜司町	鬼瓦
	延享2	1745	南都菖蒲池町	大佛殿御瓦棟梁	瓦作清兵衛	東大寺鐘樓	奈良市雜司町	鬼瓦
	延享3	1746	新口村	瓦師	相田傳兵衛	安楽寺表門	橿原市葛本町	鬼瓦
	延享3	1746	新口村	瓦師	治兵衛	安楽寺本堂	橿原市葛本町	鬼瓦
	寛延2	1749				本善寺表門	吉野郡吉野町飯貝	鬼瓦
江戸 後期	宝暦		三輪	瓦屋	谷本五郎右衛門	圓寺仁王門	高市郡明日香村	鬼瓦
	宝暦2	1752	玉手村		次郎兵衛	吉祥草寺祖師堂	御所市茅原	鬼瓦
	宝暦9	1759	吉野郡檜垣本		岩田 一	順行寺本堂	吉野郡下市町下市	獅子口
	宝暦10	1760	吉野郡檜垣本			順行寺本堂	吉野郡下市町下市	獅子口
	明和8	1771	吉野郡川原屋村		野本勘兵衛	本善寺表門	吉野郡吉野町飯貝	留蓋
	明和9	1772	檜垣本村	作人	岩田七郎兵衛・庄次郎・長右衛門	順行寺本堂	吉野郡下市町下市	雁振瓦
	安永2	1773	芝ノ口	瓦師	郡良ノ介 トシ十七才	法隆寺新堂	生胸郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	安永4	1775			谷口土佐尉橘政秀	弥勒院護摩堂	生胸郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	安永5	1776	檜垣本村		岩田七郎兵衛	瀧上寺鐘樓	吉野郡下市町善城	獅子口
	天明元	1781			土佐尉橘政秀 谷口奈良次郎	弥勒院庫裏	生胸郡斑鳩町法隆寺	鬼瓦
	寛政元	1789	坂新屋町	瓦師	五兵衛	正倉院正倉	奈良市雜司町	丸瓦
	寛政8	1796		細工人	弥太郎	本善寺表門	吉野郡吉野町飯貝	鬼瓦
	寛政10	1798	檜垣本村		源藏	瀧上寺鐘樓	吉野郡下市町善城	獅子口
	寛政12	1800			谷口氏	法隆寺西廻廊	生胸郡斑鳩町法隆寺	平瓦
	享和2	1802			谷口石見縁 橘忠恒	法隆寺東院廻廊	生胸郡斑鳩町法隆寺	平瓦
	文化元年	1804	宇陀郡極楽寺村		喜八	万法寺本堂	宇陀市大字陀小出口	獅子口・鯖
	文化6	1809	南都坂新屋町	瓦師	春田五兵衛	東大寺東薬門	奈良市雜司町	鬼瓦
	文化7	1810	土佐北口	細工所	川合半兵衛	不動院本堂	大和高田市本郷町	獅子口
	文化9	1812		瓦や	利達	法隆寺妻室	生胸郡斑鳩町法隆寺	平瓦
	文化9	1812		瓦や	利介	法隆寺西廻廊	生胸郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	文化13	1816		瓦屋	弥兵衛	法隆寺北室太子殿	生胸郡斑鳩町法隆寺	獅子口
	文化13	1816	市場	瓦屋	弥兵衛	法隆寺北室太子殿	生胸郡斑鳩町法隆寺	獅子口
	文化14	1817	坂新屋町	瓦師	五兵衛	新薬師寺本堂	奈良市高畑町	平瓦
	文化14	1817		瓦師	五兵衛	新薬師寺本堂	奈良市高畑町	平瓦
	文化14	1817	和陽南□都池乾住	瓦司	春田五兵衛 藤原治好	新薬師寺本堂	奈良市高畑町	平瓦
				職工者同産	頭通半兵衛作之			
	文化14	1817	添下郡 北之正村	瓦や	宗五郎	新薬師寺本堂	奈良市高畑町	平瓦
			勢州 山田郡 山田之村	瓦や	□藏			
	文政2	1819	南都瓦町	松皮屋	平藏	興福寺旧金堂	奈良市登大路町	鬼瓦
	文政3	1820	南都坂新屋	瓦屋	五兵衛	興福寺旧金堂	奈良市登大路町	鬼瓦
	文政3	1820	菖蒲池	瓦師	三郎兵衛	興福寺旧金堂	奈良市登大路町	鬼瓦
	文政8	1825		瓦作人	新介	今西家住宅	奈良県橿原市今井町	平瓦
	文政8	1825	式下郡今里村	細工所 南瓦屋	清五郎	称念寺本堂	橿原市今井町	獅子口
江戸 末期	天保2	1831			柏谷久作	圓照寺本堂	御所市御所	獅子口
	天保2	1831	柏原村	瓦葺		圓照寺本堂	御所市御所	獅子口
	天保3	1832	大海村		重兵衛	旧織田屋形(橿原神宮文華殿)	橿原市久米町	鬼瓦
	天保3	1832	大海邑	瓦屋	重兵衛	旧織田屋形(橿原神宮文華殿)	橿原市久米町	鬼瓦
	天保3	1832	柳本□□□大海村	瓦屋	重兵衛	旧織田屋形(橿原神宮文華殿)	橿原市久米町	鬼瓦
	天保3	1832	和州武上郡大海村	瓦屋	重兵衛	旧織田屋形(橿原神宮文華殿)	橿原市久米町	鬼瓦
	天保3	1832		瓦屋	重兵衛	旧織田屋形(橿原神宮文華殿)	橿原市久米町	鬼瓦
	天保3	1832	大海村		重兵衛□□	旧織田屋形(橿原神宮文華殿)	橿原市久米町	鬼瓦
	天保6	1835	平城	瓦師	三島三郎兵衛富明	正倉院正倉	奈良市雜司町	丸・平瓦
	天保7	1836	添下郡平松村	御用瓦師	利七	旧一乘院宸殿(唐招提寺御影堂)	奈良市西ノ京町	獅子口
	天保10	1839	今井		戒重郎 藤藏	安楽寺本堂	橿原市葛本町	鬼瓦
	天保10	1839			鈴木飛騨	法隆寺大湯屋	生胸郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	天保13	1842	大海邑	瓦屋	惣兵衛	旧織田屋形(橿原神宮文華殿)	橿原市久米町	鬼瓦
	天保15	1844			柏谷久	圓照寺本堂	御所市御所	獅子口
			柏原		谷井久兵衛			
	天保15	1844			常清	音村家住宅	橿原市今井町	鬼瓦
	天保15	1844		瓦師	庄治郎	法隆寺西門堂	生胸郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	天保15	1844		瓦師	重□□	法隆寺西門堂	生胸郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	天保15	1844			千吉	法隆寺西門堂	生胸郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	天保15	1844			万吉	法隆寺西門堂	生胸郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	天保15	1844			重助	法隆寺西門堂	生胸郡斑鳩町法隆寺	丸瓦
	天保15	1845	柏原村		谷井久兵衛	圓照寺本堂	御所市御所	獅子口
	天保15	1846	常門村	瓦師	新兵衛	圓照寺本堂	御所市御所	獅子口
	天保15	1846	常門	瓦師	新兵衛	圓照寺本堂	御所市御所	獅子口
	弘化3	1846	法隆寺 市場	瓦屋	弥兵衛	富貴寺本堂	磯城郡川西町	鬼瓦
	弘化3	1846		法隆寺瓦屋	弥兵衛	富貴寺本堂	磯城郡川西町	鬼瓦
	弘化3	1846	大峯 市場			富貴寺本堂	磯城郡川西町	烏衾瓦
	嘉永元	1848		細工	神瓦孫	教行寺本堂	北葛城郡広陵町善尾	獅子口
	嘉永5	1852			瓦佐	興福寺菩提院大御堂	奈良市登大路町	鬼瓦
	嘉永		なら 瓦町	瓦屋	佐七	興福寺北門堂	奈良市登大路町	平瓦
	安政2	1855			瓦久 三良助	音村家住宅	橿原市今井町	鬼瓦
	安政2	1855	田原本三輪町	瓦や	富吉	本誓寺靈廟	磯城郡田原本町田原本	
	安政3	1856			瓦佐	興福寺菩提院大御堂	奈良市登大路町	平瓦
	安政6	1859		かわらや	善三郎善長	南明寺本堂	奈良市飯原町	平瓦
	安政6	1859	坂原村	瓦や	清衛門 水 清衛門	南明寺本堂	奈良市飯原町	平瓦
	安政6	1859	坂原	かわらや	與市朗	南明寺本堂	奈良市飯原町	軒平瓦
	安政6	1859	坂原村	瓦師	善三郎	南明寺本堂	奈良市飯原町	軒平瓦
	安政6	1859	伊賀	瓦師	伊三良	南明寺本堂	奈良市飯原町	平瓦
	安政6	1859	京大佛	瓦師	伊三郎善忠	南明寺本堂	奈良市飯原町	平瓦
明治	明治5		和州宇智郡 原村	瓦屋		瀧上寺鐘樓	吉野郡下市町善城	獅子口
	明治5		紀州河瀬村	細工人	弥助	瀧上寺鐘樓	吉野郡下市町善城	獅子口
	明治37	1904	宇陀郡古市場	細工人・瓦製造	大倉佐治平	万法寺本堂	宇陀市大字陀小出口	獅子口・鯖

※時代区分は、文化庁文化財部参事官発行「国宝・重要文化財建造物目録」による

その活躍を江戸中期まで確認できる^(注20)(表17)。

その一方で、慶安4年(1651)の紀年銘をもつ法隆寺弥勒院表門所用鬼瓦には、「たち花あつそん(橘朝臣)/西京大工五郎右衛門」とあり、室町中期の瓦工橘氏の名にあやかって橘姓を名乗り、法隆寺食堂鬼瓦元禄3年(1690)の紀年銘以降では「法隆寺瓦大工/与次兵衛尉橘吉長」と名乗る(表17)。ここに再び瓦大工橘氏の出現を確認できる。それは、法隆寺において元禄3年より五代将軍徳川綱吉の生母桂昌院の援助で実施された元禄大修理を契機に、法隆寺御用瓦大工としての地位を確立したことが背景としてあり、由緒正しく中世以来代々続く瓦大工の家柄であることを示すためであろう。

以上の銘文は、近世における尻江田村出身瓦工の活躍と、その系譜を示すものであり、正倉鬼瓦と鳥衾瓦銘はその嚆矢を示す資料として重要である。

【製作技術】

正倉の屋根に用いられている8個の鬼瓦のうち、6個が慶長期のものである。ただし、その規格寸法は、同じ一ノ鬼・二ノ鬼でもそれぞれが異なっている。これは、鳥衾瓦でも同様で、その形状と寸法が異なるだけでなく、瓦当文様も異なる。

通常、稚児棟や隅棟での違いは生じるが、屋根の棟積のバランスを考慮すれば、一ノ鬼、二ノ鬼ごとにその高さや幅は統一されるべきものである。それは、今回の修理で葺上げられた鬼瓦の脚元の高低さをみれば一目瞭然であり、調査当初転用鬼瓦との印象をもった。ただし、多くの瓦工が参加した慶長修理においては、各瓦工の功績を称え名誉を与える意味で、鬼瓦製作には独自の腕を振るわせる自由度を与え、統一の規格寸法を用いなかったのかも知れない。

その中であって、西ノ京出身瓦工による鬼瓦と鳥衾瓦にみられる、その製作技術は、他を圧倒するほど優れている。

それは、鬼瓦の各棟位置での瓦繰りは当然のこと、取り付け鳥衾瓦の瓦当部分の角度や頸部の長さ、瓦当部から胴部(雁振部)にかけての反り具合を考慮するだけでなく、鳥衾瓦を鬼瓦の母屋(板)部分に納めるための頸部と胴部(雁振部)との隙間、さらに胴部雁振側面部分の取り付け角度に至るまでを計画的に製作し、寸分たがわず納めるといった高度な製作技術をもっていることである(図27)。



図27 慶長期鳥衾瓦

これは屋根全体の曲線表現が決定された後、稚児棟から隅棟に至る取り付きと棟曲線を表現するために、鬼瓦や鳥衾の据え付け角度とその位置、個々の瓦の形状を決定し、それに従い製作されたことが窺える。

この高度な技術をもった瓦工こそ、中世橘氏の流れをくむ正に西ノ京の瓦工集団であり、他の瓦工集団には真似することができない、瓦生産と葺きの両方を行うが故にもちえる特殊技術で、橘氏が自らを「瓦大工」と称した所以でもある。

(5) 近世南都における瓦生産の拠点と瓦師の動向

寛政期と天保期修理の瓦銘から考察する（表17）。

寛政期修理銘には「寛政元酉年/坂新屋町住人/瓦師五兵衛」とある（図18）。この瓦師は興福寺金堂鬼瓦（下層南東一ノ鬼）「于時文政三庚辰歳四月上旬 南都坂新屋町 瓦屋五兵衛（後略）」にも確認できる。また、軒丸瓦No.10（表12）には胴部凸面に「春」の文字をヘラ書きするものがある。これは文化6年（1809）の東大寺東楽門の鬼瓦銘「南都坂新屋町/瓦師春田五兵衛」や、文化14年（1817）新薬師寺平瓦銘「春田五兵衛」などから、瓦師五兵衛は、苗字が「春田」で、1800年前後に活躍した瓦師であったことがわかる。

次に天保期修理銘には篆書体で「天保六乙未年 瓦師三郎兵衛」と楷書体で「天保六年/乙未年 瓦工平城住人/三島三郎兵衛富明」の印がある。この瓦師（瓦工）三島三郎兵衛は、元禄再建の東大寺大仏殿と中門・回廊の屋根瓦を請け負い、また興福寺金堂鬼瓦（下層南西一ノ鬼）「文政三庚辰年四月 瓦師菖蒲池 三郎兵衛」にもあるように、「三嶋三郎兵衛」の系譜を引く瓦師である。

18世紀以降における南都の瓦師は、中世に成立した東大寺を中心とする東大寺七郷や、興福寺を中心とする南都七郷に拠点を構えて瓦生産を行っている（表17）^{（注21）}。

具体例として、包永町・高天市町・菖蒲池町・坂新屋町・瓦町があげられる（図28）。その中で、高天市町・菖蒲池町・坂新屋町は互いに近接した町であり、瓦屋を営む一大拠点をなしていたことがわかる。また、享保20年（1735）に作成された郷土史本『奈良坊目拙解』によれば、銘文であげた菖蒲池町・瓦町だけでなく、小西町俗に瓦釜町にも瓦屋を営む者が居たと記されている^{（注22）}。

江戸時代における瓦屋の生産体制は、例えば橿原市今井町に所在する称念寺本堂では、文政8年（1825）に屋根瓦修理が実施されるが、その際補足瓦を近隣に所在する6つの瓦屋から調達している。このことは、当時の瓦屋が大量の瓦生産を行えるような体制でなかったことを示し、村単位に存在する寺や商家向けの瓦を生産する小規模な家内制手工業規模のものであったことが窺える。

それは文政2年から3年の興福寺金堂再建においても、「菖蒲池」・「坂新屋町」・「瓦町」の各瓦屋が共同で製作していることから窺える（鬼瓦銘）^{（注23）}。また瓦屋一単位内の構成は、例えば南都瓦町の檜皮屋平蔵（瓦屋平蔵）では、内織工方瓦師として5人、坂新屋町の瓦屋五郎



図28 南都諸郷図（国史大辞典編集委員会『国史大辞典 第十巻』1989年 吉川弘文館 788頁の図を改変）

兵衛は、内織工として11人を抱えていたことがわかる。

おわりに

今回の平成修理で不再用瓦となった10,000枚以上の古瓦については正倉院事務所が保存、一部を資料として管理することになった。古瓦は粉碎され産業廃棄物で消えていく運命の中にあって、本来の屋根瓦としての機能は低下しているが、屋根瓦の形をほぼどめた状態で後世に伝えられるのは、非常に喜ばしいことである。同時に、後世の屋根瓦修理時に再び使用される可能性をも残せたことに価値がある。

瓦は建物を保護するのが役割であり、消耗品であるが故に残りにくい側面がある。しかし、現在実施される多くの修理事業が文化財保存という名目で行われている以上、古瓦を如何に残し再利用していくかが喫緊の課題である。

現在、東大寺の瓦研究において、軒瓦以外でまとまった資料は存在しない。その中であって正倉は奈良時代から現代に至るまで各時代の瓦が現存し、本稿にてその編年と特徴を紹介できたことは、今後東大寺の瓦研究を進める上での十分な指標になるとともに、その分類方法は役

立つはずである。

そして、この考古学の瓦研究で培った分類方法を文化財建造物の調査作業でも取り入れ、屋根瓦研究を進展させるべきであるとともに、専門に屋根瓦調査を実施できる体制を整えることと、調査後の資料保管までを含め責任をもって実施することが求められる。

(あしだ じゅんいち 総持寺寺史編纂所調査研究員)

注

- (1) 公益財団法人 文化財建造物保存技術協会『正倉院正倉整備記録』宮内庁、2016年（以下、整備報告と略す）
- (2) 判断基準は、丸瓦の場合、古代は風蝕と縄叩き痕、中世は焼き色とヘラ削り調整、近世は焼き色と楕円形かつ和蠟燭型といった形状と丁寧なナデ調整、近代・現代は表面の燻状況といった特徴から判断した。一方平瓦の場合、古代は模骨痕や布目痕、中世は離れ砂や狭端縁の深く幅広い面取調整、近世は谷（円弧）の浅さと、丁寧なナデ調整と狭端縁の幅狭い面取調整、近代・現代は表面の燻状況といった特徴から判断した。
- (3) 整備報告 169頁から173頁
- (4) 整備報告 170頁
- (5) 整備報告 162頁
- (6) 飯田剛彦「正倉院宝庫修理の歴史と自然災害」『正倉院紀要』第38号、2016年
- (7) 中世期の屋根瓦は、軒先瓦は釘穴を設けとめるが、平瓦は葺き土、丸瓦は一部玉縁に釘穴を設ける。しかし、瓦の釘止めの比率は少なく、基本的に瓦は葺き土によって留められていたといっても過言ではない。単純に比較はできないが、葺き土の劣化に関して、現在の文化財建造物の屋根瓦の葺き替え工事が、明治・大正期、昭和30年代、そして平成期であることからすれば、その寿命は70年前後と推定できる。また葺き土は経年によって、粘度が低くなる。このような状況下で台風や地震に遭った場合、瓦の破損と落下は引き起こされる。
- (8) 整備報告では、桶巻き作り平瓦（B1）には、玉縁が長く取付く位置の高い丸瓦（B2）が組み合うと報告されているが（97頁）、瓦の焼成や胎土の類似、さらには荒池瓦窯から供給を受けている可能性が高いことから判断して、桶巻き作り平瓦（B1）に組み合う丸瓦は玉縁の取り付け位置が低い丸瓦B1であることをここに指摘しておく。
- (9) 芦田淳一「第5項 瓦」『国宝 法隆寺中門ほか二棟修理工事報告書』奈良県教育委員会、2019年
芦田淳一「第5節」『国宝 平等院鳳凰堂 平成修理報告書』宗教法人 平等院、2019年
- (10) 飯田剛彦「正倉院宝庫修理の歴史と自然災害」『正倉院紀要』第38号、2016年
- (11) 芦田淳一「第11項 瓦」『重要文化財 長福寺本堂修理工事報告書』奈良県教育委員会、2017年
- (12) 奈良県教育委員会「瓦調査編」『国宝 唐招提寺金堂修理工事報告書』2010年
當麻寺金堂は2000年、2015年に実見調査をさせていただいた。
- (13) 芦田淳一「第5項 瓦」『国宝 法隆寺中門ほか二棟修理工事報告書』奈良県教育委員会、2019年
- (14) 京都府埋蔵文化財調査研究センター『奈良山瓦窯跡群』1999年

奈良県立橿原考古学研究所「名勝奈良公園・荒池瓦窯跡」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）』
2011年 2013年7月に実見調査をさせていただいた。

- (15) 奥村茂輝「奈良時代における興福寺の造営」『南都仏教』第98号、南都仏教研究会、2013年
- (16) 島軒 満「第Ⅴ章 総括」『新薬師寺旧境内—奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書—』奈良教育大学、2012年
- (17) 島軒 満「第Ⅲ章 出土遺物」『新薬師寺旧境内—奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書—』奈良教育大学、2012年
- (18) 奈良県教育委員会『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書発掘調査篇』東大寺、2000年
- (19) 法隆寺昭和資財帳編集委員会『法隆寺の至宝 第15巻』小学館、1992年
- (20) 芦田淳一「第11項 瓦」『重要文化財 長福寺本堂修理工事報告書』奈良県教育委員会、2017年
大和郡山市に所在する常福寺と薬園寺の瓦については現地にて実見した。
- (21) 両表は、奈良県教育委員会発行寺社の修理工事報告書と現地における瓦の調査成果に基づき作成した。
- (22) 村井古道著・喜多野徳俊訳・註『奈良坊目拙解』綜芸舎、1977年
- (23) 藪中五百樹「安土桃山・江戸時代に於ける興福寺の造営と瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅶ』2005年

正倉屋根瓦主要個体一覧（丸瓦）

※型式番号の後に、個体番号を記載する



奈良時代B 1 (379)



奈良時代B 2 (412)



平安時代D 1 (443)



平安時代D 2 (448)



平安時代D 3 (449)



平安時代E 1 (453)



平安時代E 2 (454)



鎌倉時代F 1a (526)





鎌倉時代F 1 b (474)



鎌倉時代F 1 c b (550)



鎌倉時代G 1 a (602)



鎌倉時代G 1 b (569)



室町時代H 3 (647)



室町時代I 2 (695)



室町時代J 1 (690)



桃山時代K 1 (771)





江戸時代M 1 (799)



江戸時代M 2 (817)



江戸時代N 1 (977)



江戸時代N 2 (982)



江戸時代O 1 (862)



明治時代P 1 (990)



大正時代Q 1 (1005)



大正時代Q 2 (995)



正倉屋根瓦主要個体一覧（平瓦）

※型式番号の後に、個体番号を記載する



奈良時代B 1 (223)



奈良時代B 2 (1435)



平安時代D 1 (1454)



平安時代D 2 (1443)



平安時代D 3 (1483)



平安時代D 4 (1508)



平安時代D 5 (1447)



平安時代E 1 (1545)



平安時代 E 2 (1551)



平安時代 E 3 (1557)



鎌倉時代 F 1 (1670)



鎌倉時代 G 1 (2191)



鎌倉時代 G 2 (2247)



室町時代 H 1 (2282)



室町時代 I 2 (2269)



室町時代 J 1 (2361)



桃山時代K 1 (2402)



江戸時代M 1 (2633)



江戸時代M 2 (2755)



江戸時代N 1 (2932)



江戸時代O 1 (2878)



明治時代P 1 (2936)



大正時代Q 1 (2950)



大正時代Q 2 (125)